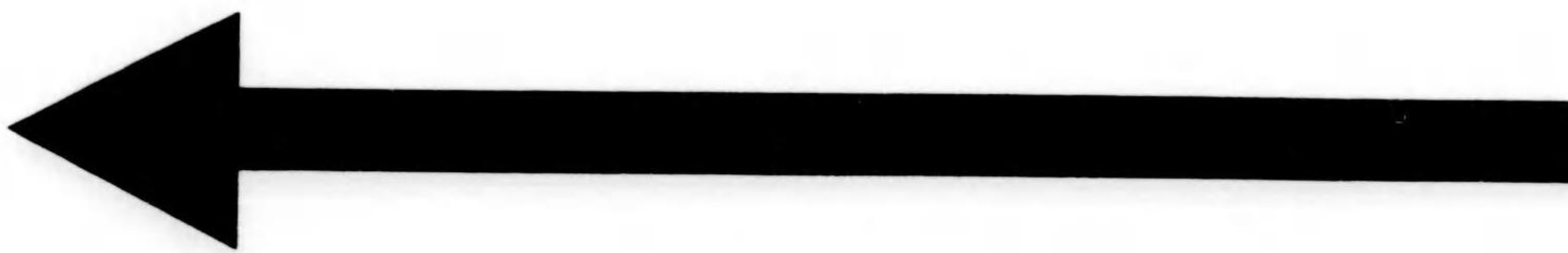
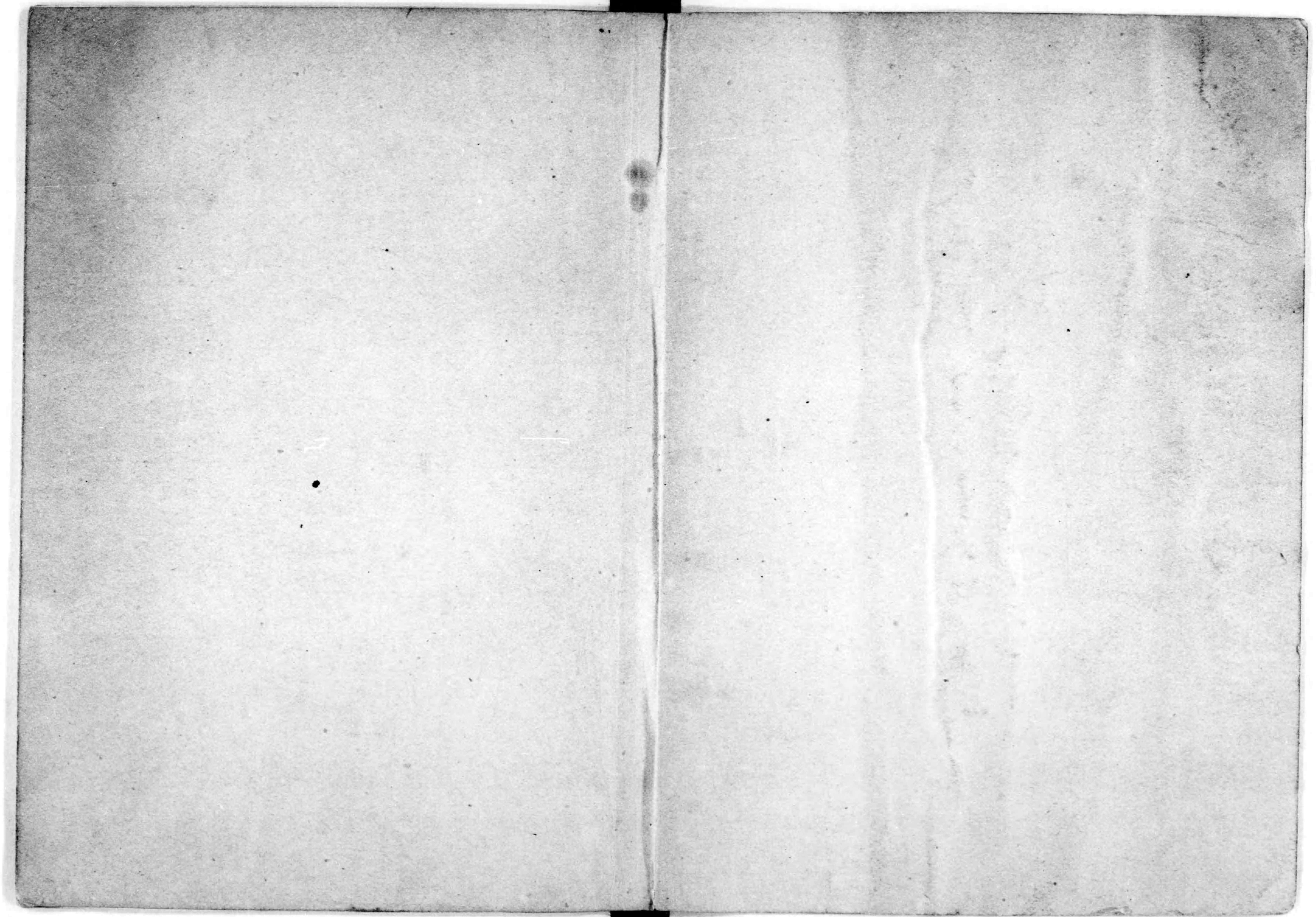


始



Handwritten text, possibly a signature or name, written vertically in a cursive style.

101



持100  
34

押川春浪序

霹靂火著

全世界大探險  
**爆裂艦隊**

東京本郷書院

大正  
1.12.21.  
丙寅

序文

『爆裂艦隊』！何んぞ其名の猛烈なる、余未だ著者を知らずと雖も、其稿を見るに行文輕妙にして、着想は壯快を極む。近來星や董の文學漸く屏息して、武俠冒險探檢的の快著世に流行するは、我田引水に非ず。雖も、國家の爲に大いに歡ぶべき事

と信ず一言を序して此一書の出陣を壯  
にす。

大正元年秋

武俠世界社ニテ

押川春浪識

### 序

白砂、青松と共に連り碧波磯に躍る沼津千本濱の海岸に一旅  
舎あり。曰く福壽美館これなり。余盛夏の炎を避けて此處にあ  
り。松籟颯々として彈琴するかと疑はれ、涼風は袂を弄び、  
身は忽然として沌濁なる現實に立脚せるを忘るゝが如く也。空  
行く雲の如く漠々たる空想の糸をついつて此の『爆裂艦隊』な  
る小冊子を作るに至る。これ素より徒然の生欠伸を嚙むる方  
辨として筆をとりたるものなれば、そのくだらなき事は云ふ迄  
もなし。賢明なる讀者諸君よ、諸君にしてもし晝寢の眞最中  
に棚からポタ餅落下して諸君の口に入らんか！これ實に奇な

るべし。而して珍なるべし。もし『かくの如くに實行出來得しならば即ち奇ならん』と云ふ空想より此の一篇は成る。今や一般の社會状態は、利己主義者を生ずる事日に甚だしく、人道は地に墜ち、道徳は頽れたり。而して第二の國民ともなるべき青年の思想は亂れて、力を以て自己の運命を開拓するが如き意志鞏固なる士は容易に求むる能はず。片々たる戀愛の痴夢に酔ふもの多し。余は此の篇中に、十有余名の青年を描き、現代の理想的人物と云ふ。青年の意氣再び挽回し、此種の理想的青年の生れん事を切望するもの也。

進歩せる二十世紀の科學を提げて、地球上の最南極を研究せんとする青年團は果して、よく偉大なる自然の力に對抗し得べ

き耶！

此の空想より綴られたる拙なき書にして、若諸君の机上に載る事あらんか、著者は之を以て最大なる光榮とするもの也。

終りに望んで本郷書院主の手を介し本書の序文を給はりし押川春浪先生の好意を感謝す。

千本濱の福壽美館にて綠蔭に晚風を追ひつゝ

大正元年十一月

霹靂火識

全世界  
大探検 爆裂艦隊目次

（一） 告知板の怪文字！

寂寞たる帝郡の深夜——怪しき自動車——告知板前に佇む男装の美人——三浦岬の大閃光。

（二） 咬龍會

快天の壯舉——東洋人種の精力發輝——只死あるのみ——刎頭の士十八人——紅顔の美少年——朗々たる吟聲——一抹の雲烟——萬里の波濤——首領は科學界の泰斗。

（三） 甲板上の大活劇

晴快なる航海——咄！怪船——電光石火——一刀兩斷——死



屍如レ山——三名の土人——金銀財寶——賊船を焼く——活劇  
の後——魚飛んで船に入る。

### (四)

#### 白人種の迫害

ニュージーランドの夜——英國人の來襲——石炭の賣店なし——  
任狹なる本邦人——東洋人の罌丸を見よ！——醉洋人——鉄  
拳一激——人種的偏見——三志士の奮闘——夜半の出帆。

### (五)

#### 悲愁歌

二個の疑問——鬱蒼たる大森林——三人の洋人——婦人の泣聲  
——己れ曲者！——正義の刃——奇遇——戀と戀——ゴリラ  
の襲來——不意の銃聲——悲戀悲歌——麝香薔薇の蔭に美しき  
死體を埋む。

### (六)

#### 狂戀美人



(七)

各國決死隊の競争!!

愛嬢の失踪——三浦半島の一角の遺跡——佳人が佳人を救ふ——  
 戀の敵——母の使命——觀音丸に乗込む——大颶風——沈没——  
 洋人に救助さる——ピストルの強迫——森中の活劇——

(八)

南極の新比翼塚

負ければ日本の耻辱——國民に申譯がならぬ——割腹は覺悟の前で斷行——毛唐に負けて耐るもんか——正々堂々と對峙せよ——  
 出發の前夜——蕃人の襲撃——哉、惜名花一輪朔北の風に散る——志士の苦衷——自殺はならぬ——尼になれ!——  
 卑劣なる二探検船——砲彈の進呈——大冒險!

昔日の壯語今は悲愁の歌——壯烈なる死鬼神を哭かしむ——合葬の議——大賛成——南へ……南へ……

(九)

滑稽なる同志打

決勝點に近し——不意の砲聲——レンズに映る滑稽パノラマ——  
——第三者——御手並拜見——賀三同志打——以三彈丸——祝之——  
英佛二國の船沈没す——雲か山か將た南極か！

(十)

北朔風に翻るはこれ極東の日章旗！

目指す地點——曠荒たる南極地——欣喜雀躍——最後の月桂冠——  
——朔風にひるがへる日章旗——祝砲三發——天地震動——世  
界的大成功。

附錄 風穴探檢記

(一) 出發前

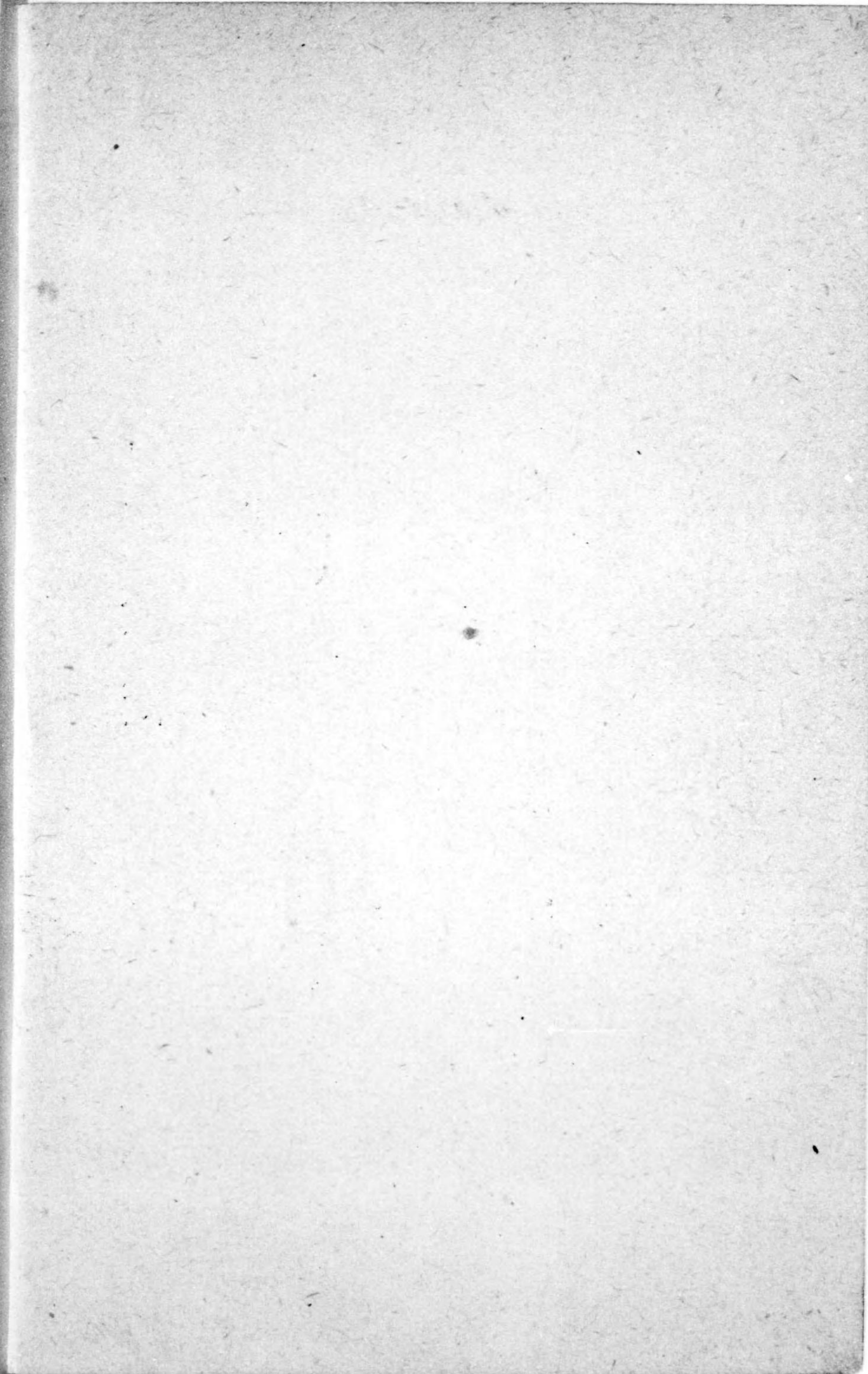
同行五人——自稱豪傑——異様の服装——村童の驚異——日本一の富士の裾野——富士岡村有史以來の大壯舉

(二) 暗々黒

貧亡籤——渡邊丑君——先道第一怪物仕止めた——短刀の閃めき——咄——此臆病者——悶絶——大議論。

五

全世界  
大探檢  
爆裂艦隊目次終







……すに入旺を行此し飲鯨に板甲にひ大び結義八十兒健

界の大成功。

——朔風にひるがへる日章旗——祝砲三發——天地震動——世

全世界  
大探検 爆裂艦隊

押川春浪序  
霹靂火著

告知板の怪文字！

寂寞たる帝都の深夜——怪しき自動車——告知板の前  
にイめる男装の美人——三浦岬の大閃光！

終日人生の苦闘に疲勞と困憊を重ねたる、帝都五百萬の人士  
が、漸く深き眠りに落入らうとする十二時すぎの事である。

枯柳の枝が幽霊の足か手の如くも揺ら／＼とする銀座街頭の  
大時計は眠たさうに十二時を報じて稍しばし。月は皎々たる光



と陰影とを收めて、高樓の彼方へ没し、瞬くものは金色の、幾千、何萬の數へ切れぬ星屑である。夜の帳は殺氣を含んで深く蔽い冠さり、その闇憺たる帳の中から生るゝ一陣の醒風は、一種——形容し難い凄慘な氣を傳へる。

莊嚴、靜肅なる大都の深夜！吁！何と云ふ恐ろしい時刻であらう。

恰度その時である。一臺の自動車は此の夜の殺氣を衝いて京橋橋上に大なる軋の響を残して、銀座街頭を一直線に走つて行くのであつた。その軋轢たる音響は交番の巡查の惰眠を促がすが如くである。「我は怪しき者也不忠實なる查公諸君！吾を追馳けて正せよ」と云はぬばかりに、新橋を越して、新橋停車場

の前で、ピタリと止つた。そもその自動車より現はれる人は何者であらう。大臣か伸商か又は大詐偽師の類乎！

否！否！

その自動車の中には一人の人影はなかつた。さては伸商のお迎でもあるかと、云ふに然うでもないらしく。縦横自在に手把を動かしてゐた一運轉手は、疲形の身を黒羅紗の外套に包んで頭市は眞深く額を隠してゐる。

靜かに車臺を放れて、石の階段を三四段上りつめて、とある黒い板の前にピタと足を止めた。それが宛然釘付にでもされた如く、甚だ機械的である。

見よ、その旅客告知板には如何なる文字が書かれてあるか？

細長い告知板の片隅に小さく白墨で記したのは、ABCと云ふ三字の英字であつた。

「まア——ではいよ〜〜」

と運轉手の口を漏れたのは細くて透る女の聲であらうとは。

「では忠夫さんもどうしても出懸なさるんだらうか！」

又もかう呟やくや瞳を落付けて沈つと見入る輝ある眼は儘かに女性である。地藏眉のすなりとしたさまも、外套の頭巾から頬へ亂る三四條の黒髪から見てもどうしても女である。されば此の妙齡の婦人が、百鬼惡魔の跳梁を檀にする深夜に、而も假裝して何故に新橋停車場の告知板の前へ現れたのであらう。此處に一個の疑問は生れた。

續者諸君よ、此の一美人の行動に注意したまへ。深夜停車場へ現れた原因が遠からず分るであらう。

「呸！眞實に行つてしまつたのかしら！」

美人は又も同じ事を繰返したが、不思議や星の如き美しい瞳は曇つて、輝く露は、その愛らしい紅頬を傳はるのであつた。折柄、眠むさうな顔の驛員が此方へ歩み來るのに氣が付いた假裝の美人は、残り惜氣に告知板を放れるや、しほ〜として自働車のほとりに歩み戻つた。そして、押し出すやうに歎息を吐いたが、俄かに懷中を探つて一葉の手紙めいたものを取り出して、覺束ない光で讀しはじめた。

貴嬢の厚きお志の程、身に泌み骨に徹するばかり嬉しく

候へども、御存じの如く小生には大望有之候。咬龍會の同志たる小生は、決死艦隊の一員たる小生は到底婦人——いや片々たる戀愛の痴夢に酔ふ事能はざるにて候。我等同志の行くべき道は、先づ幽明界と定めるが至當かと存じ候。即ち決死！なればにて候。萬に一ツの生還は覺束なかるべくと存じ候。又此の大望が成功せざる上は生きて再び母國の土を踏み月を仰ぐべき考へは微塵だに御座なく候。日章旗が南地氷塊の上に翻るに非ざれば、同志の骨はそが日章旗に變りて、冷たき月に曝さるべく候。此際小生の立脚點としては、貴嬢に此の事を發表して永別の辭を替ゆるが妥當かと存じ候。こは小生が貴嬢の厚意に對する萬分の一の報恩かと思考仕り候。

さらば美しき露子様よ、今宵三浦半島より遠く南極の天地を望んで去なんとする一青年を眞實に愛さるなれば此の出發の日をそが忌日となして冥福を祈り被下度候。貴嬢が從來の好意に報ゆるために遙かに一書を呈して永別の辭に替へ申候。

十一月七日

村田露子嬢

宇佐美忠夫

「あゝ！ごうしやう」  
 自動車に身を投げかけて、又もハロ〜と美しき泪を手紙の上<sup>うへ</sup>に注いだ時、怪！怪！遠く天の一角よりして電光一閃！暗黒なる闇を稻妻の如く光つて、その光芒たる光は睡眠しつゝある

大都を照して過ぎた。

つと顔を上げた露子が、屹と天の一方を仰いだ時、又も一閃  
バツと露子の半面を蒼く輝せば、泪に濡れた顔の露子は、頬に  
亂れる後れ髪の幾條を噛みめめて、

「三浦岬！出發の信號かしら！」

と小さく叫んだが、我れしらず聲を上げて號哭したのであつ  
た。

今宵、狂戀の一美人を故國に残し三浦岬を出發せんとする所  
謂決死艦隊の同志——咬龍會の會員は果て何れの國へ向つて發  
するのだらう。何を目的に拔錨するのだらう？。

讀者諸君よ。

決死艦隊とは果して何か？

咬龍會

快天の壯舉——東洋人種の精力發揮——只死あるのみ  
——刎頸の士十八人——紅顔の美少年——朗々たる吟  
聲——一抹の雲烟——萬里の波濤——首領は科學界の  
泰斗。

あはれ狂戀の美女が、大都會の一隅、新橋停車場の構内の自  
働車上に於て、望み見たる一條の閃光の發する源は、怒濤高く  
海濱の岩を噛み、松籟颯々として天に鳴る三浦岬の一角の漁村  
である。

夜色正に酣に、萬象は聲を殺して眠る深更。とある高丘の上

に突立つて、探海燈を縦横に動かしてゐる紅顔の美少年があつた。身にはツメ襟の洋服を纏い、右手に探海燈を動かしてゐたが、折角下手から何人か丘を目差して昇り来る氣勢に。

「誰だ！」

と凜とした聲で一喝する。

「僕だ。東だ！」

と暗の中から聲あつてぬつと美少年の傍へ立現はれたるは、身の丈は正に六尺に近く、鐘鬼髻をぐつと左右に捌いて、眼光是炯々として、氣の小さい者はその一睨に氣絶する位の事はあらう。

「どうだ宇佐美！いゝ加減にしたらいゝだらう。夜中の電氣信

號も見る奴は屋の上の戀猫か、夜稼の泥棒位の者だらう。もう止めろよ」

破鐘のやうな聲で云へば、宇佐美と呼ばれた美少年は、にっこりとして

「止さう。だが我々団体は一度錨を抜き、ともつなを切つて故國の陸と放れる上は決して生還は欲しないんだらう。だからよ、深い魔睡の夢に落ちてゐる人々だけに、暗に我々艦隊の決別の辭を呈するんだ。夜稼の盗人でも、屋根の上の戀猫でも——」

宇佐美は言葉を切つて、

「又珍らしく勤直の巡查の眼に映じたとすれば我が願は足りるんだ。」

又も閃光を遙か東京の方へ送つたが、

「東君、ぢやア貴命に従つて止めとしやう」

とそれを、肩にしてすたくと砂丘を下る。

「波は大いな」

東が降りながら、啞塔たる響に耳を傾けて吐くやう。

「波位何だ。我々の前途は多事だ。これ以上大きな波瀾と闘はなければならぬんだ」

「勿論！さうして東洋人種の絶倫な精力を白色人種に知らせる必要があるんだハハハ、ハハハ、愉快！愉快！」

砂丘を下り切れば、小松林は黒く魔の息の如くも逼つてゐる。その松林の細道へ、懐中電燈の光りを便に分け入つた兩人は、

廳で、大いなる鐵の門の前に立止つた。つと進んでギ、イとその扉を排した東は、後よりつづく宇佐美を振り返つて、

「オイ、宇佐美！此の門ともいよくお別れなんだ」

と暗に破顔一笑。

見上ぐれば六角塔はニコライ塔のそれに似て高く空間に聳へ、四面みな煉瓦造りの洋館は、小松林を抜いて兀として高く、悪く言へば秘密結社乎。虚無黨員の巢窟とも形容したい位である。クリームいろの帷巾の揺るゝ一間は海に面し、その窓には明るく電燈は灯つて、光は、松原の中へ流れ込んでゐる。これぞ「妙な別荘」と呼ばれて、四隣の村人の噂に高い、東都△△大の教授。理學博士男爵東條芳臣氏の別荘である。

今や二階の一室には圓い大卓を圍んで七人の青年が、集つてゐる。丸顔もあれば、面長もある。顎の角張つたのもあれば頭の大きいものもある。而してその眉と瞳を見よ。炯々たる光はよく人を威壓するの氣を示し、眉の間に迸る言ひ知れぬ色は、重大なる決心を示し、大壯圖を描いてゐるが如くである。その七人の青年の中には、山口五郎と云ふ高等工業出身の技師がある。早稻田大學文科出身の文士がある。その名は宇佐美忠夫。航海學校卒業生の鐘鬼髯、會員中隨一の巨大漢、六尺豊かな東秋之介は殊に異彩を放つて見へる。紅顔花の如き美少年たる宇佐美の蕭洒な風采と、東秋之介の巨体巨軀巨顔とは不可思議珍妙の好對照である。

「もう出發するだらうになア」

と腕を組んで椅子にぐつと背を靠せて、仰りかへつてゐた東が先づ口を開いた。

「さうだ、もう一時間もしたら出發だらう」

宇佐美はかう云ふや、山口五郎を見て、

「ねえ君、博士は何處へ行つたんだね、僕は出發信號をしに行つてたから……」

と云ふ。

「電話室だ。牛込の本宅と何かの打合せがあるだらう」

山口は眼を閉じて靜かに腕を組む。此時であつた。東はトンと膝を叩くや、

「分つた、貴様怪しからんぞ宇佐美！母國の民に暗に決別の辭と云つたのは嘘の皮だらう。あの何とか云ふたな、絶世の美人よ……」

と考へこめば

「東君、村田でせう」

と横から口を入れたのは某新聞の三面記者で奮つて同志の中へ加盟した鈴木秋草と云ふ男である。

「然り！さうだ！村田露子嬢！その美人に人知れず暗號決別をやつたんだらう。怪しからんぞ貴様！奢れよ、然すんば胴上だ」  
練馬大根の如き兩腕を突出して宇佐美の返事を促がす様は宛ら喧嘩腰である。黙つてゐた宇佐美は、美しい顔に微笑を浮べ

て、

「馬麗な、何だくだらないー」

と一言の下に排斥して了つた。

「隠すな、これはどうしたんだ、これは……」

突如手を伸ばして逸早く逃げ出さんとする宇佐美の体を抱きすくめ、ぐつと上衣を捲れば、あはれ木綿の肌襦袢と思つたのは見當外れの甚だしいもので、千鳥に波の渦を巻く緋縮緬の肌襦袢であらうとは！

「ヤッ！艶福家！」

突狂に叫んだのは裁縫部に雇はれたる會員の若山生。

「胴上！胴上！」



誰か、叫ぶや、忽ち六人の手は宇佐美の体にかゝつて、その体は空間に三四回舞ひ上る。この一大笑劇の真最中――

「何ぢや、酷い騒だな」

と入口の扉より現はれたるその人は、此の咬龍團の首領として、日本科学界の大恩人たる男爵、東條芳臣氏である。

「や！先生」

第一に頭を掻いて恐入つたのが東秋之介である。

「又、東の悪戯かなハハハ……」

眼のあたり、眉のほとりに言ひ知れぬ微笑を湛へて云つた男爵は、

「一体どうしんたぢや………宇佐美！」

「ハイ……」

と云つたが、流石に宇佐美もそれと言兼ねて顔を赧ふした。

「どうしたんぢや！」

又問はれて、

「何アに、宇佐美君があまり色男ですから、出發を祝するため酒の肴の餘興です」

山口技師は沈著て云つた。

「嘘です、冗談です」

宇佐美が慌て、取消さうとすれば、

「知つとる、宇佐美知つとる！」

と云はれ愈々恐入る。

「ハハハ……」  
歓聲は一時室を壓したが、

「さて！」

と男爵が叫んだ時！一座はひたと、元の静蕭に立返つた。

「お待遠だつたがいよく支度が出来た。さア、あれを見い」

男爵は窓のほとりに立寄つて、クリーム色のカーテンをサラサラと捲上げて、暗い海上を指す。

咄！見よ、その海上——陸地より約一町ばかりも隔たる沖合に浮べる赤き灯の数々。それは一個の船体の窓より漏るゝ火であつた。

「オ、ー！」

と叫んだのは宇佐美である。

「我が咬龍會萬歳！」

全身の血が熱し、高調に達した如く、鐘鬼髪を逆立て、東が叫んだ。

と見てゐるうちに大いなる船体より離れた小舟が一艘！

「先生——あれは？……」

絶へず歡喜の瞳を見張つてゐた山口技師が云へば、

「同志ちや！此處で祝盃を上げるためにわざわざ来るのちや、諸君がまだ未見の同志に紹介しやう」

と除に云ふ男爵の顔にも隠し切れぬ喜びの色が浮いてゐるのである。

四邊より打寄する怒濤狂瀾をはたと睥睨して、恰もよし群羊を臨んで静なる猛虎の如き三百噸の我が東洋丸。これ實に千世の偉勳！船は小なりとも、これを動さんとする人は決死である、これに乗せんとする人も勿論生きて再び母國の月を眺めざるの志士である。今此の三洲半島の波濤に泛んだ東洋丸が他日南極氷塊の上に浮んで日章旗が檣頭高く翻る際の大偉觀はさうであらう。正に世界の耳目を聳動する時、同志の心はさうであらう。

かう思ふと一同は肉鳴り血躍るを禁する事は出来なかつた。「愉快！愉快！」

みな異口同音に同じ言葉と繰返してゐる時、小舟は早や渚に

着いたらしく、黒い影は静かに松原へ隠れた。と思ふと、はや鐵の門扉がギョ、……と開く音がして、男爵夫人の案内で一室内へ案内せられた人数は十人。これもみな精悍無類の志士である。外國英語學校卒業生の廣島と云ふ青年の二十四歳を頭に、未は二十一歳で適例前の徴兵猶豫を受けてゐる青年ばかりである。

背廣の洋服を着た男爵の姿を見るや、皆な敬しく禮を施した。「御苦勞だつたな、よく時間までに来てくれたな、最前から此の通り同志が待つてたのぢや」

と山口技師以下七人を指さして「此處にゐる七人も皆な私の股肱ぢや！これからは此の十七人

私まで入つて十八人の同志は堅く信頼し合つて我が咬龍會のため  
めに盡して貰いたい。さうして倭民族の名を發揮し白人の膽を  
寒からしめなくちやならない、常に小さな個人の感情にのみ駛  
らす十八人の家族也、兄弟なりとして考へて貰いたいのぢや。  
或は又、刎頸の友でもえ、莫逸の友でもい、兎に角一致を  
缺くやうでは到底成功は覺束ないからなア——私は只これだけ  
云つて置く。他の仕事は諸君の個人くで自己の仕事に忠實で  
あつて貰へばい、んぢやから……」

と男爵は一場の訓戒を與へるや、卓上のベルを消魂しく鳴ら  
した。すぐ扉を排して現はれたのは、男爵夫人と、三人の美し  
い令嬢とである。身に純白なる洋服を纏い、髪も稍波打たせて

すらりと立つたあでやかさ。その容窈たる姿に宛然天女降臨と  
でも云つた如くに十七人は眼を見張る。現はれた純日本風の夫  
人と、洋装の三令嬢とは、小間使の運び來る三鞭酒をづつと注  
ぎ廻る。

恰度姉なる嬢——加代子が蠟のやうな白い纖手に、三鞭の饌  
を持つて宇佐美忠夫の盃に注がうとした時、どうした手の狂ひ  
か、その盃ははたと卓の上に倒れて、柔い卓かけに泌み行く  
芳烈なる酒の香！

「どうも粗疎いたしました……」

花の顔をバツと赧ふして聲を顫はして云へば、

「何アに、何でもないんです」

と宇佐美は木綿のハンカチーフをフワリとそのこぼれた酒の上うへに蔽おほひ冠かぶせて、

「ハ難有ふ！」

となみく注つがれた洋盃やうばいを手に、グイと一呷いちがつその心地よささうな顔色かほいろを、瞥ひらと見た加代子かよこは、忠夫ただおに見返みかへされてハッと赧あかくなりながら慌あはて、次の東あづまに注ついだ。

かくして十八人の會員かいゐんが陶然たうぜんと酔よつた時

「宇佐美貴様きさま唄うたへ！我輩わがはらが一ツ舞まはふ」

と叫さけんだのは例れいの鐘鬼髪かねきぎの東秋之介あきあきのすけであつた。

「好矣！」

宇佐美は勢いきほひよく立つて、窓まどのほとりに寄よる忽たちまちち卓たくを片附かたづけて

片隅かたすみに同志どうしが集あつまれば、三令嬢さんれいぢやうと、男爵だんしやくと夫人ふじんは、大勢おほぜいと相對あひむかが如ごとく反對はんたいの側わきへ居ゐ並ならぶ。南地なみちへ向むかふに就つて特とくに東あづまが獲身用くわくしんようとして用意よういしたのは、鏝元つぼもとに金銀象牙きんぎんぞうがをちりばめた三尺二寸さんじやくにんすんの日本刀ほんたうである。銘めいは關孫六せきまろ。東家先祖傳あづませんぞでん來らいの大刀たいたうであるとか。

それを悠々いゆうく腰こしに手插たはんで、襟えりを正ただして二三歩にさんぽすゝむ。窓まどのほ

とりに突立つたつた美少年ひせうねん宇佐美忠夫さみただおは朗々らうくとして謠うたひはじめる。

衣ころも至袖そで至腕うで 腰間秋水鐵可斷わうかんしゅうすゐてつたつべし 人觸斬人馬ひとふれはひきをきるうま

觸斬馬ふれはうまをきる 十八交結健兒社まじはりをむすふけんじのしや ……………

高く低く又ゆるく、その律律ロロは唇くちびるを漏もれて静しづかなる夜よるの寂寞せきぱく

たる空氣くうきを衝ついて四隣あたりに流ながれ行く。その聲こゑの美うつくしさ！一上じやう、一

下ひ、水みづも耐たらぬ秋水しゅうすいは電燈でんとうに光ひかつて、總身そうしんは自ら粟あはを生しやうずるが

やう。

「素的！素的！」とか、或は拍手の聲は盛んに起つて此の練瓦造りの大履も揺るゝばかり！正に南極の地に向つて去なんどする一行の意氣は天を衝くの慨がある。馳て痛快なる劍の舞が終つた時、

つと席を前に進めた男爵は、懐中を探つて取出したる金時計を開いて、

「出發！」

と大きく叫んだのであつた。今まで蜀の關羽、張飛、玄徳の三傑が桃園の契の舞に酔はされて、その舞の巧妙、朗吟の美しさに舌を巻き、それを賞讃するに余念なかつた同志は、急に襟

を正して靜かに男爵の次の言葉を待つのである。

「出發ぢや、用意はいゝかな」

男爵が再び叫ぶと同時に、ふと扉を開いて東秋之介は去つた。

「さア、用意が出来たら出懸やう。糧食の一切は疾うに運んであるんぢや！宇佐美、山口、用意はいゝかな！」

「ハア、もう出来て居りまする！」

「さうか。では……………」

男爵は片手を高く上げて、夫人と三令嬢を顧みるや、

「私が命令通りにな……………いゝか、通信は宇佐美が係で、その手から来るので……………新聞紙にいゝか……………」

と命令してやをらどつしりとした体を椅子から上げたのであ

る。

「呸！これ死別か生別か！夫人は稍ともすれば滲み出でんとする涙を嚙むの心苦しさ。」

「成功して早う御歸國の程をお祈いたします——」

と云ふ聲は流石に顫つたのであつた。男爵を眞先に十七人がぞろ／＼と玄關に現れ、

此處には巨大漢東秋之介が忽ち變る洋服姿に防寒具及び種々の日用品を小使や下男を手使して車に積んでゐる。

同志は揃つて艦上用の靴を履いてゐる。後から出た宇佐美は腰かける處がないゆへ、仕方なしに立往生の後へ近づいたのは、令嬢加代子であつた。

「あのお氣を付けて……………」

と云ふ聲も流石に小聲で、而して語尾は顫へて微かに聞かれなかつた。

「ハア——」

その厚意を謝するには只この一と言。

賢明ある讀者諸君よ、此の咬龍會の同志。十八人は三百噸の東洋丸に乗つて南極へ行くのである。成功と否はとまだ雲とも雨とも云ひ難いのと同じて分らぬのである。

果して此の一行は南極の氷塊の上に、日章旗を立ち得るであらうか。倭民族の絶倫なる精力、勇氣の程を歐米各國に誇り得るに至るであらうか！

その夜——午前二時半頃。

絶大の雄圖を期したる咬龍會の志士は、永らくの巢窟たりし三浦半島の小松原と別れ、遠く／＼萬里の波濤を破つて去つたのであつた。突兀たる六角塔の頂から、小窓に身を倚せてその行を見送る男爵夫人及び三人の令嬢は乃父の安全、大望成就健康を祈つたのであるが、獨り姉の加代子嬢のみは他の二人の妹や母よりも最も一ツ深い心配と愁ひを持つてゐた。そも何であらう。此の令嬢のみ、他の人より憂慮の念が一入多いとは………。他にあらず、これはみな運命の神が偶然に與へた悪戯である。自然の愛の神が放つたキュピットの征矢は、深く加代子の胸を射つたのであつた。早稻田文科出身の文士！宇佐美忠夫の

名は加代子の胸の中を騒がせ、眼の前に幻となり影となり霧の如く靄の如く、濛朧として加代子の頭腦から離れないのである。

(三三) 甲板上の大活劇

晴快なる航海——咄！怪船——電光石火——一刀兩斷——死屍如山——三名の土人——金銀財寶——賊船を焼く——活劇の後——魚飛んで船に入る。

三百噸の東洋丸は、何れの造船所で造られたか、何處で糧食を斯の如く積上げたか、して何處に隠れて突然三浦半島へ現れたか。

これに就て讀者は必ずや深き疑問を抱かれてゐる事だらう。著者は此處に東洋丸に就て少しく説明したのである。



東洋丸は廢船である。▲郵船會社の廢船である。それを買ったのは、博士夫人の兄君で横濱の某貿易商店主である。勿論東條博士の方から依頼があつた事は當然である。而して此の廢船を修繕したのも横濱港の船渠である。されば食料の一切もその貿易品の如くにして積まれたものと思ひたまへ。それにしても博士は何故にそれを秘密の中に行はうとしたのであらう? ……これには甚だ敬服すべき點があるのであつた。外國にも近くは我國などにも南極地探險の冒險をするものはあつたが、それが皆な同じやうな木偶人形ばかりで毫も科學の素養のない人間の無謀な企てに過ぎなかつた。或は又例の山師の金儲け手段であつた。されば一度として成功した例がない。失敗は既に母

國の陸を放れない前に一目瞭然たるものであつた。これを非常に残念に思ひ憂慮した博士は自ら卒先して南極探險隊を組織しやうと企てたのであつたが、それを公にして天下の聲にしては、もし失敗した時に申譯がないと云ふ處からして、密にその運動に着手してゐた。そして博士は鞏固なる意志の青年を選ぶに或る一種の策を勞したが、かくして三ヶ年の間に功積み漸く計畫だけはなつて、すぐにでも實行出来るまでに運んだのである。博士が三浦半島に別莊を作つたのも秘密に南極へ向ふべき一ツの手段であつた。そして最一ツ不可議なのは、博士が何故に各種學校の生徒を漁つたか云ふにそれは他の原因ではない。宇佐美の南極探險誌の編輯と別莊内の夫人の手に送

るべき通信の原稿係に於ける如く、外國語學校出の廣島の通辨の如き、山口技師の天候豫側、水流の如何を研究擔當の如き又は船長の助手として航海學校出の東秋之介の如き皆な獨特の任務を受持つてゐるのである。他は或は宇佐美の助手をしたり、或は山口の手傳をするとか云ふ風に助手兼船内の雜務を引受け

てゐるのである。

此の東洋丸が探海燈を照しつつ、遙かに故國の大日本帝國の陸地を放れた翌日―男爵夫人の手よりして各新聞社通信社に、東洋丸の出發が傳へられたのであつた。『博士南極探險を企つ』とか、『南極探險隊長は理學界の偉人』とか各新聞が大騒ぎして國民にその事を傳へた時には、もう東洋丸は遠く南海の天地

―香港あたりまで進んでゐた。

天は高く雲は白く、十二月半ば初冬の天氣は好晴で此の上もない良航海日和である。白雲は碧波に映じ、阿呆鳥の群が南を指す地中海の只中、執務を終つた宇佐美學務課長は、その蕭洒なる姿を甲板上に現はれて、雲を見、海を見、面して阿呆鳥の一群を見、天性の詩情は除ろに動いて、『雲耶山耶吳乎越乎』と熱狂派詩人賴氏の詩の一節を微吟してゐると、靴音靜かに後から寄添つて、ボンと肩を叩かれたので、驚ろいて振返り、

「先生でした……………」

かとにつこりする。

『好い天氣ぢや喃』

「好航海日和とも云ひますかね」

「む。」

「もう日本とは余程離れたのですな」

「刻一刻離れてゐるさ……」

「まだ前途は瞭遠ですな」

「遠いわい。が……興味がある」

「さうです。仲々面白いんです」

「何氣なく望遠鏡をとつて、」

「山も島も見へませんでせうか」

と眼に當てたが、俄かに、

「先生！先生！」

と叫んだ

「どうした！」

甲板をそいろ歩きをしてゐた男爵が慌て、宇佐美の傍へ近寄れば、

「あれは船でせうか、煙が極くうすく淡く見えますが……」

「どれ……」

男爵は宇佐美の手から望遠鏡をとつて眼に當へたが、

「成程、船ぢや、而も妙な船ぢやな、此の船を見掛て来るやう

ぢや……船首が此方に向ひてる」

暫くの間望遠鏡を放さず、見てゐた男爵は、

「怪いぞー」

と叫ぶや、  
船室を覗いて、

「オイ、誰かゐないか！東！東！」  
と叫んだ。

「ハイ」

例に依つて例の通り三尺二寸は關孫六の太刀を腰に落さしにした東が、六尺豊かな巨軀を兀つと甲板上に現はした。

「見い、これを、君はどう思ふ」

望遠鏡を渡されて、東は、屹と前面を見つめてゐたが、  
「船が見えます」  
と眞面目である。

「船は定つてゐるが、怪しいと思はんか！」

男爵が微笑しながら云ふ。

「わ！怪しい」

男爵の一言に躍り上らんばかりに驚愕した東は慌て、又も望遠鏡を眼に當てたが、

「此方へ参りますな、段々！」

「さうだらう」

相變らず男爵は微笑したが、

「事によると地中海名物だぞ！」

「わ？……地中海の名物つて云ひますと……」  
宇佐美と東とが顔色を稍變じて問ひ懸ると、益々落付拂つた

男爵は、

「海賊かも知れない！」

と流石に顔色は引しまった。

「海賊！」

鸚鵡返しに繰返した宇佐美が思はず懐中内に密ませた券銃を

ひしと握れば

「大丈夫です、腰間秋水あり、憂ふる事勿れ！です」

巨大漢東はにつこり笑ふや腰の關係六をスラリと抜いた。紫

電閃電！氷の刃は宛然大和男兒の稜々たる氣骨を誇るに似て燦

然と輝やいてゐる。

「まふ抜いたのかな」

男爵は振返つて破顔一笑したが、急に眞顔になつて、

「もし海賊船であつたとすれば是非東秋之介先生の御手並を拜

見せにやならん事になる。

「斬るんですか、この人斬庖刀が振廻せるとは願つたり叶つた

りです。なアオイ宇佐美、これだから此方はいゝんだせ、先祖

傳來の關係六を……」

とそれを縦横に振るので宇佐美は危険な事夥だしい。

「東君、もういゝ加減でいゝよ、頼むから止めてくれ」

宇佐美はかう云ふや又も望遠鏡で沈つと烟を眺めた。がそれ

が段々近ずいて、肉眼を持つて、臍氣ながら煙影が灰見へるや

うになつて來た。

東は何時の間にか船室へ降りて、自稱豪傑共を澤山引張出して来た。

「見給へ、あの煙を……海賊船かもしれないつて先生が云ふんだ。もし先生の鑑定通りの時は、素的だ、大活劇が行はれるんだ！痛快だらう」

刻一刻に東洋丸は西南へ向つて駛る。それを追絶るやうに怪しき船体は一瞬一秒と近づいて来る。最前から無言でこの船を凝視してゐた山口技師は、ひらりと身を轉じて船室へ入つたが、糖て船長を誘つて甲板へ戻つて来た。

「どれです  
船長が聞く。」

「あれです、あの船です」

「成程」

船長は宇佐美の手から望遠鏡を受取つて眼に當てたが、

「訝しいですな、此方へ向いて来るんですから！」

と怪訝に耐へぬやう。

「實に不思議だ！」

男爵はかう叫んだが、傍の宇佐美を見返して、

「誰でもいゝから望遠鏡をもつてマストへ昇つて見とゞけさせてくれ」

「ハ……」

宇佐美は自ら望遠鏡を手に、梯子を昇つてマストへ入つた。

甲板では男爵、船長、以下十人ばかりが瞳を見張つて容子如何にと見守つてゐる。

暫くしてからである。

「海賊船だ、今——急に米國旗を掲げた、航海停止信號でもするのに違いない！」

と叫びながら宇佐美はマストから降りて來た。

「いよく海賊か！」

男爵は爛々たる眼光を輝かせて、遙かに海上を睨みつめたが、「逃れた處で追附かれるだらう。仕方ない、抵抗しろ！」

と改めて命令するのであつた。素破一大事である。萬ヶ一の時にと用意に据付た小さい機關砲の砲口へ馳附たのは山口技師

であつた。宇佐美は船室へ飛込むや、これも用意の日本刀を腰に挿こんで、券銃を右手に擬して寄ば一發と云はぬばかり、

一方では又男爵と東どが押問答してゐる。

「先生の御生命さへあれば此の雄圖は再び繰返されるのです。

大事な体を海賊襲來位に落して耐るもんですか、憚乍ら東秋之

介の力のつゝ限り船室へ賊を入れるやうな事はいたしません。」

「いやいかん、死生を共にすると云つて國を出て來たんぢや君達ばかりを働かして吾輩が見てゐられるものか、いや絶對にいかん」

「いや東は先生が甲板上にゐられる事は大不賛成です。」

頑として男爵は動かないのであつた。

「先生、失禮！」

云ふより早く、東は練馬大根式の怪腕を飛ばして男爵の体軀を易々として抱くや、逸早くも船室の中へ連込んで了つた。暫くして現はれた東は双腕を叩いて、

「糞！生意氣な海賊船め！反對に奪つてやるぞ！盗みためたものを……」

と氣焰快焰は當るべからず。東洋丸甲板上で此の小活劇が行はれつゝある最中、怪しき船は東洋丸を目蒐けて接近するのであつた。

「呸！東洋丸の運命は果して如何？」

絶大の雄圖を抱き、英國スコット大佐と併行して世界的大事業をなし、英勝つ乎、日勝乎と云ふ行途の間に於て、あたら海賊共の犠牲になるのであらう乎？。正にこれ東洋丸運命のきま

る秋である。

怪しき船は東洋丸を離るゝ事約半哩ばかりの處へ來るや、航海停止信號旗を高く掲げたのであつたが、東洋丸は急速力を出してどん／＼と走つてゐる。

今までの怪しき船は明らかに海賊船である。何となれば彼船が橋頭に掲げた米國旗が、我が日本の船の航海を止めるの理由がないからである。

咄嗟！賊船も大速力を出して追馳けはじめた。その迅速なる



事は殆んど言語に絶してゐる。忽ちの間に追付かれて船体と船体との舷々相摩すばかり、危機は漸く眉宇の間に迫つた。突如、轟然たる大音響を齎らして、一發の機關砲は早くも敵の機先を制して敵船の汽鐘部に命中したのであつた。ついで一發、又一發、六七發の彈丸は賊船を驚かし、なす術を與へさせなかつたのである。不意に撃たれて賊船は喧擾又喧擾!!

彼等は最初東洋丸を只の商船とのみ思つてゐたのであらう。だから不意の機關砲襲撃に狼敗したのである。

「糞！」

山口技師は満身の力をこめて又も機關砲を操縦する。その度に賊船の火災は烈しくなるのであつた。澤山な海賊の群が、

あたふたとして甲板上に現はれて防火に余念ない時、東秋之介——六尺の巨大漢に宇佐美、廣島、鈴木外三名は、端艇を落すや忽ち敵船に乗移つたのである。

そも何たる痛快事ぞ、反對の襲撃!

敵船に躍入つた東が、上甲板へ突立上つた時、一人の賊は、突如短銃を擬したが、その時遅く此の時早く、紫電一閃、腰なる孫六の銘刀は右手に光つた。

「エイ！」

と大喝一聲。

あはれ洋人は日本刀の銳利なるに忽ち眞二ツ、肩から胴中まで袈裟斬である。倒れる奴も見向もせず、身を進めて、敵對する

奴を、スバリと車斬！ついでに宇佐美、廣島等は勢を得て、短銃を放つもあり、一刀を振かぶつて胴切にするあり、甲板上には時ならぬ血櫻が咲いたのである。

山口技師が満身の力をこめて操縦した機關砲のために傷けられて或は斃れたものが十三四名、それに加ふるに、突撃隊のために斬られたのが十有余人。海賊船は殆んど全滅の体である。肩から胸、胸から爪先まで一面に尊い人の血を浴びて立つたる決死艦隊唯一の豪傑東秋之介君が、柄も身も血にひたつた大刀を右手に携さげて船室へ入れば、ついでに宇佐美も敵の巢窟を突いて一撃にそれを織滅やすべく大刀を握りしめて船底へ下りた。廣島鈴木もそれについで船底へ下つた。けれどもその船

底には何者があるか分らぬ。今まで斃れたものより以上に澤山の賊があるぬとも限らぬ。或は亦、爆發樂でも秘めて、一撃に諸賊の腹響を企てぬとも限らぬ。危険の上の危険、冒險もこれ以上な險を冒す事は何人にも出来得まい。

東がとある船室を慥めてゐる間に、宇佐美は猛進して、船室中、一番美麗な室の扉に手をかけて、先づ耳をすまして室内の様子を伺つたが人の氣勢だにせぬ。空虚の部屋だらうと合點した宇佐美が、その扉を押開た一刹那！呀と云ふ間もなく、一發の銃聲は起つた。ついでに又一發！

「呀！」

と叫んで白烟濛々たる中に倒れたのは宇佐美である。兼て新

橋停車場構内に於て、假装の美人をして泉々たる紅涙を絞らしめたる美少年、尙、東條男爵の今嬢加代子の眼に忘れられぬ幻影を印して去つた紅顔の美少年たる宇佐美忠夫も二十四歳を一

期として地中海上の露と消へたであらうか？……  
宇佐美の斃れるの見たる一賊は、身を躍して廊下へ出た。  
右手に券銃を携げてゐる。

「馬鹿者！」

賊は凄い笑顔を頬と額に刻んだが近寄つて一蹴しやうとした瞬間！奇々怪々！

宇佐美の右足は飛んで兇漢の兩足を風の如に薙ぎた。

「唸！」

と兇賊が叫んだ時には最早や攻守轉動、宇佐美の右手の秋水は一閃した。

「ヤッ！」

と一聲。脳天から鼻柱へかけて眞二ツ、其處へ銃聲と叫び聲を聞きつけて馳付たのは東と廣島とであつた。

「どうした」

「此の野郎生意氣な！」

宇佐美は再び肩口あたりに一刀を浴せて、傍の兩人を顧みるや、

「此の毛唐奴！旨く僕の計畫に落ちたんだ。今ね、僕が此の部屋を覗くと、パチリ一發鳴つたんだ。失敗つたと思つたが突嗟

の妙計！よくお芝居なんかでやる奴さ、ばたり倒れて殺られた真似をしてゐると、足蹴にしやうとしたんだ。その足を見事にとつて御覽の通りさ………生命知らずの馬鹿野郎だよ」

宇佐美がかう語ると、東は両手を打つて、

「但し宇佐美式だね、大成功！」

と云ふ。

「これを早速書んだね、南極探險誌の冒頭を装る一大文字だ」  
 廣島がかう云つてゐる處へ、他の三人が三人の色真黒の土人を各一人づゝぐるゝ巻にして引立てゝ來た。

「どうしたんだ、一体その黒ん坊は？……」

宇佐美と東が血刀を振つて質問した。

「何でもないんだが只此の土人が三人一室へ押込られて泣いてゐたんだから不思議で連れて來て見たんだが第一言葉が分らないんでどうする事も出來ないんだ。いつそ虐殺しちまわふか！」

「よし、面白からう、生かして置いた處で南極まで連れて行く譯には行かないんだ！痛快だ虐殺ちまへ」

第一に讚成したのが東であつた。八人も人を斬つたためか、もう血を見る事なんぞ屁とも思はず、すぐ例の太刀を揮はふとする處は血を好む太古の埃太の民族の如くである。

「甲板へ連れて行かう」

東が真先に土人三人を間に挟み、後軍が、宇佐美で揃つて甲

板へ上れば、どうした事か賊船は左に烈しく傾斜してゐるではないか。

「オ！沈没かしらー！」

突狂に東が叫んだ。

「馬鹿云へ、こんな船と情死して耐るもんかね」

廣島はかう云つて呶々大笑した。

「さア斬らう」

一人の土人を甲板上の板敷に座らせて、孫六の大刀を片手上断に振冠つた。土人はこれを見るや唇をびり／＼と座撃させ、涙をホロ／＼こぼして手を合して拜するのである。

「駄目だよ、空泪なんかこぼしたつて助けるもんか！」

東の一刀が正に、土人の頭を刎ねんとする瞬間！

「待………鳥渡待給へ」

と横から叫んだのは宇佐美であつた。

「何だ」

東は躊躇して宇佐美を見た。

「止めたまへ」

宇佐美は手で東を制して、

「強いばかりが武士ではないよ……つて唄さへあるんぢやアないか、それにこれ等は賊の仲間ぢやアないんだらう。もし仲間なら縛つて一室へ閉じこめて置く筈がないよ、洋人の土人虐殺は文明の裏面に含む野蠻で、有名なもんだ。西洋人が虐待した土

人なら我々東洋人が救つて、赤裸々の眞實な東洋主義を見せやつたらいいだらう。扶弱控強は我々祖先から與へられた遺傳のハワーなんだ。  
例の流るゝ如き宇佐美の能辨に、東もさこそとは氣が付いたが、

「だが而し限ある料食をこんな無能な黒ん坊なんかに與へちやア耐らないせ……」

「だからさ、何も南極まで連れて行くには及ばないよ、途の港へ何處へでも置いて行けるんぢやアないか」  
「成程！」

東が宇佐美の説に服した。他のものとても決して罪のないも

のを斬殺したくわない。況んや扶弱控強を主義とし標榜せる祖先の意志に叛くと云ふ事を自覺するに於てをや。

「處で……」

半ば微笑しながら宇佐美は東を見た、

「ごうだい、賊徒のものを又掠奪してやうぢやアないか、いゝだらう」

「勿論さ、最初からそのつもりなんだ！」

「オヤ〜！」

三人の土人の繩を解いてやると、

「オイ！」

と手を上げて、東洋丸甲板上の同志を手招きさ。

艦て海賊船より東洋丸に積込んだ物品の類は實に甚だしく莫  
 大なものであつた。糧食は十八人の同志が百日の間は裕に食し  
 得る位。その他、金貨、銀貨とりませて約五萬圓ばかりと、金  
 指環とか、金時計とかダイヤモンド入りの腕環とか牧擧に違な  
 いのである。尙東を先導に残る狼なく船室を探し廻つた處が、  
 曾つて宇佐美が斃した男の室内から五人の容宛たる花顏柳腰の  
 美人が現はれたのであつた。これ等は良人と共に楽しい新婚旅  
 行の途に上り、航海中に海賊船の襲ふ處となり、良人は虐殺さ  
 れて自分は賊船に拉せられて賊魁の色慾の犠牲にされたのや、  
 或は亦その旅行中賊船に奪はれて、強迫的に首魁の待さしめら  
 れたりしたので、花の顔も漸く衰へ、腫の色は哀れにも曇つて

ゐた。佛蘭西人が二名、米國が一人、西班牙が一人に英國が一  
 人と云ふ順であつた。

その美人をも本船に擁した上、選ばれて東將軍は爆發藥を抱  
 いて賊船の船底深く降り、これに火を點じ日露戦争時代の杉野  
 兵曹長の如き冒險を犯し首尾よく成功して本船へ戻つて約三四  
 分間！

轟然として龍神の夢を驚かし乙姫の耳朶を破るが如き大音響  
 は、大いなる渦巻を起して、海底深く没し去つて了つた。多年  
 地中海上に暴威を振ひし海賊船の末路の哀れなるを、これを一  
 擧に屠つて他日商船の航海をして安全ならしめたる咬龍會同志  
 の壯擧は實に破天荒の大偉勳である。痛絶又快絶！

分捕品を山の如く積りし甲板に立つたる東條男爵は破顔一笑して東、宇佐美、廣島、その他、山口技師一同の勞を賞した。天は尙晴郎波は穩かに船は油の如き波上を肅々として進む。船員一同も、新たに收容したる外國婦人の五名と、土人三人と共に靜かに祝盃を上げてゐる時、慌だしく船室の扉を押開けて入つて來た歩哨の一人は、

「宇佐美さん、今、此の魚が船に飛込みました！」

「さうか、それは目出度い！」

と受取つた宇佐美がそれを拜しく男爵の前へ出した。

「魚が船に入るのは幸福の前兆だ、我が咬龍會萬歲！」

三鞭を上げて高く叫べば、巨軀將軍東秋之介はやをら、立上

つて。

「我が咬龍會、決死艦隊萬歲！」

### (四) 白人種の迫害

ニュー・ジブラントの夜——英國人の襲來——石炭の賣店なし——任狹なる本邦人——東洋人の罽九を見よ——醉洋人——鐵拳一擊——人種的偏見——三志士の奮闘——夜半の出帆。

或時は怒瀾渦卷の中を進み、或時は油の如く靜かなる海を行く。山は紫に霞む日は行雲流水——常に詩想豊富なる宇佐美忠夫の眼をどの位喜ばしたらう。南洋孤島に一夜の宿をとりし日



陸に咲く仙人掌及びレモンの花の香に喚然たる詩句は胸を衝き唇を漏れて、忠夫のノートブックをこの位豊かにした事であらう。波は怒り風は荒れて、船體は今に覆らんとする度に、忠夫は甲板に立ちて、暗き海上に眼を投げかけて、人類が大なる自然に對する反抗の如何に微々たるかを思ひ、暗然と涙に咽んだ。

かくて一行がニュージラランドのウエリントン港に着いたのは母國では門松建て、若い少女が追羽子にお白粉筆を持つて騒ぎ喜ぶ正月の末であつた。此處で石炭の供給のために漸く淀泊する事になつた。

永い航海に倦んだ同志の一同は、參々伍々として、三人、或は

四人づゝ夜のウエリントン市街を見物に廻つたのであつた。然るに何ぞや此の十何名の一團に又も一ツの不幸が湧出しやうどは——。讀者諸君は既に外國地理で御存じであらうが、此のウエリントン港は我が同盟國たる英國の領土の一角である。

日清戦争によつて、はじめて日本の眞價の十分の一を知り得たる洋人は、日本人に對して從來の如く奴隷扱ひは廢したが、尙、幾多の嘲笑と、侮蔑を擅にした事は我々日本國民の永久に忘るゝべからざる一事實である。彼等外人は日本民族をして徒らに瘁猛なる殺伐を好み、血を喜ぶ野蠻人に鳥後毛の生へた位に思つてゐるのだつたらう。然るに日露戦役に於て日本人の美點は容捨なく發現せられ、加ふるに日本國民の頭腦の發達の著

るしさに驚かされたのだ。此處に今まで侮蔑が一變して新たに  
 敬慕の念と變つた。而してその念は日本の急速なる文明の發達  
 を呪ひ尙一度進んでは偏狹にも日本人を恐れ曾つこれを遠けや  
 うとしたのであつた。それは即ち排日の思想を以つて立派に證  
 明せらるゝのである。歐洲各國に於ける排日論の火の手の如何  
 に烈しきかは一歩足を彼地に入れたものは何人もすぐ知覺する  
 事だらう。彼の紐育ヘラルドなる一新聞の如きは、常に排日論  
 を堂々として書き立て、日本人は遂に歐洲をも奪ふ曲者だとな  
 るで極論してゐるではないか。此の排日の思想は、米國より英國  
 に、英國より佛蘭西に刻一刻と傳播したのであるを、何として  
 英國のみ此の思想に汚されてないでゐやう。同盟國たる英國の

民族の頭にも、「恐るべも日本、厭むべき黄色奴！」なる思想は  
 明らかに傳つてゐるのは當然の結果で敢て怪むに足らない。さ  
 れば同盟國だとして心を許す事の出來ぬ。常に卑むべき感情にの  
 み支配されつゝある彼等の頭は頗る醜劣を極めてゐるのだ。形  
 式ばかりの、表面ばかりの同盟が何にならう、彼等英國人士が  
 人知れず研く毒瓜を去らざる限り吾人は絶對的同盟破壊を絶叫  
 するものである。

而も南極探險隊としてスコット大佐が我が東洋丸——咬龍  
 團の東條芳臣男の卒ゆる決死艦隊とは目下競争の有様である故  
 尙英國一部の人士が此の探險隊を忌み、これを逆待するのは勿  
 論である。

無盲なる彼等英國民の一團が突如として淀泊中の我が東洋丸を襲撃したのは、晝の喧擾が静まり、凄惨なる異國の風が醒く吹きしきり、錨のともづなを浸す潮の音の、物凄く聞ゆる夜の十時頃である。

十五六艘の端艇はヒシ／＼と船側近く押寄せたが、甲板までは水面を抜く事約二間と云ふ船の高さなので彼等は、十六艘の端艇より一散に小銃を連發しはじめた。パチン！パチン！と云ふ音に先づ甲板へ現はれたのは巨大將軍東君であつたが、この容子を見るや憤然として怒つた。宛然破鐘の如き大聲を發して大喝一聲！  
「馬鹿！」

その聲に大いなるに思はず洋人等は小銃の發射を止めたが、又も烈しく打ちはじめた。彈丸は船體に命中しては時ならぬ電光を散らした。船室より持出したる毛布を楯にして遙かに暗に海上を隙かしたが、切齒扼腕怒髮天を衝くの勢で船室へ降りるや此處は又大喧擾を極めてゐる。

「騒ぐな血迷ちやアいかん、しつかりせい！」  
彼は巨體を運ばして秘密室へ馳付た。後から此處へ馳付たのは宇佐美と山口技師とである。

「どうする？」  
「暴發藥だ、短矩里なので機關砲が使へないんだ」

と叫んで五六個のダイナマイトを抱へて甲板へ飛上るや端艇を見かけて無二無三に投付た。幸ひに彼の船體に的れば憂として聲あり。船は忽ち轉覆の悲運に遇ひ、十名近くウエリントン港内の魚類の腹を肥す料となつた。

又も東將軍の手を放れた一個のダイナマイトは一端艇の左舷に暴發してその大なる音響は静寂神秘の帳に包まれし港内に轟き淀泊中の各國汽船の甲板上には吞氣にも御苦勞にもこの一活劇見物が黒くなつて並んだ。

「わゝ面倒な！ 宇佐美つゞけー」

虎の吹ゆるに似たる東がかう叫んで、端艇を降りかけた時、東洋丸の船體は靜かに搖ぎはじめた。これは首領たる東條男爵

の命令で、野蠻無頼の徒に對するには避けるに如くはなしと云ふ處から急速に錨を抜いて、港外へ去らうとするのであつた。

「なせ抜錨するんだ、毛唐を一刀兩断しろ！」

東は甲板上で自團駄踏んで齒嚙したが仕方なく船と共に身は港外へ出た。唇を一文字に屹と結んだ東の顔には口惜さうな色が歴々と讀まれた。關孫六の柄頭を押へた手は渾身を湧躍せしむる血に顫へた。嘸！關孫六の秋水は腰にあつて、卑肉の歎に泣いた事であらう。港外に錨ををろした東洋丸の甲板では、何故に洋人が東洋丸を襲撃したかと云ふ問題を主題に、皆な疑問の眉を寄せてゐた。

「不思議！ 不思議！」

と叫んだのは東である。

「船を間違わたんぢやアだらうか」

廣島は利口氣に口を切る。此時！

「分つてるぢやアないか、彼等は皆んな英人だよ、スコット大と競争する我々東洋丸は眼の上の瘤なんだ。だからよ。」

と云つたのは宇佐美である。

「成程！」

一同が感心する。處が廣島のみまだ疑問は晴れぬであらう。

「だが而し宇佐美君」

と鳥渡言葉を切り、

「もし我々の一行を邪魔物にするのならば、英人のみでなく米

人も此の擧を企てなければならぬ筈だ。米國のスペリイ大尉も今や出發する間際ぢやアないか」

「だらうが、それは違ふよ、此處は英領なんだ。もし米領へ行つたら或は迫害を加へないとも限らぬ。而し多少なりとも智識のあるものなら、そんな偏狹な行動を執つて國際問題を引起すやうな馬鹿な真似はしないでだらう」

宇佐美の雄辨には同志は何時も酔はされて了ふ。

「もうどうでもいゝぢやアないか」

面倒臭い事の大嫌の東將軍はかう叫んでその晩は二人の歩哨を甲板に立たす事にした。自ら進んで出たのは東と、鈴木とであつた。宵から曉まで此の海上の風に吹かるゝ嘸苦しい事だ

らう！それにしても憎むべきは白人種の偏狭なる對度である。  
不安を抱いて寢床の上へ横はつた同志は仲々眠られないので  
あつた。劔を按じ、短銃を握つて眠ると云ふ有様であるもの。  
同志は皆な敵の襲來にのみ氣をとられてゐたが、首領東條男  
にはより一層多い心配があつた。それは他に非ず、石炭の供給！  
呀！彼等は人種的偏見から東洋丸に石炭を與へなかつたとした  
らごうしやう。東洋丸は腕を組んで此のウエリントン港に立往  
生しなければならぬのだらうか？

その夜は事なくして終つた。

「夷敵再び来るか、我が腰間の秋水は先づ汝等の首に加へらる  
事、事を記憶せよ」

と云ふ意氣組で甲板よりハタと陸上を睨んで立つた東將軍

は、

「なんだ馬鹿くしい」

と笑ふ。

「腕を鳴らして待つてゐたのに……」

鈴木は云ふた。

かくして一同小銃のために破損の箇所を調べると尠くない。一  
先港内へ入つて除ろに修膳を加へやうと云ふので、日の丸の日  
章旗を、高く橋頭に翻して静々と入港する様は威風凜々とし  
て見る人、望む人はおのづからうすら寒さを感じたのである。

其日ニユジランド諸新聞は筆を揃へて日本南極探險隊は無

謀、無智識、到底スコット大佐に遠く及ばざる事を傳へ、而してその最も甚だしきに至つては、彼等は探險隊の名を假りて、その實は各國の軍備の機密を探る一種の軍事探偵とまで極論した。されば、咬龍會の同志が石炭を購ふべく、終日石炭會社及び各賣店を漁つたが、僅か一斤だけの石炭も求め得る事は出来なかつた。同志は擧つてその、頑迷不屈を罵つたが如何ともする事は出来なかつた。殊に東將軍などは虎髭を逆立にして、當港警察署へ談判し、國交を利して強制的にでも石炭を供さしめて見せるとまで叫んだが、東條男は、靜かにそれを制して、昨夜の不意襲撃を知つて、これを罰せざる程の依姑ある警察署が如何として我が探險隊のために力を貸すべきや、到底駄目では

あると云ふのであつた。然らば此の一行はいよゝゝ立往生するものであらうか？

捨つる神あれば救ふ神ありとでも云はうか。此處に任狹なる一人が現はれんとは！そもその任狹なる一人とは何者であらう。

終日市中を漁つて無能に終つた同志が血涙萬斛！悲憤し慷慨してゐる時、甲板に立つた一人がアタフタとして、

「端艇が来た。ボートが来た！」

と叫んだ。前々夜の襲撃に要領おさゝぐ怠りない同志は、忽ち獲物くゝを持って甲板上に立現れた。

「一艘しかぢやアないか」

「大膽だな！頗る」

「暴烈弾でも抱へた決死の士かなハハハ……」

一同は、只の一艘と對手か定つたので、洪笑一番、來たらすぐ一刀兩斷と、刀を撫し、力瘤を張つて待つてゐる。此の騒ぎを聞きつけた東條男は、靜かに船室を出て、望遠鏡を手に甲板の一隅に立つて、遙か三四町も隔てた波上に、右に揺れ、左に波に弄るゝ一端艇を沈つと凝視した。

「ヤッ！日本人ぢや！」

聲ははや口を衝いて出た。

「日本人ですか、先生！」

東は同僚の持つてゐた望遠鏡を取つて眼に當てたが、

「さうです、日本人ですな」と不思議さう。

なつかしい母國の民と聞きた時、一同は眼を見張り、波に揺れる端艇を凝視してゐたが、咄嗟！

どうした機會か、横波に一ツ大きく煽られて、大部澤山の浸水があつたやうで船の進退も甚だ不自由のやう。

「誰かあれを助けに行け！」

男爵は大聲した。

「ハイ……」

と三四の士は急で端艇を降して、それに飛乗んとする刹那！  
「待て！」



と別に叫んだ人があつた。それは東將軍である。

「なせ止める？」

「先生！」

東は言葉を切つて、

「例へ本邦人でも限つて我黨の人とは断定は下されません。敵

か味方がまだ分らん今……」

東が尙も云ひついでやうとするのを、

「急な場合ぢや、敵も味方も盡す眞實に動かされぬ奴があるか

！早く行け！」

擡は忽ち白い波を破つて、矢の如くに波に惱まされつゝある

小端艇を見かけて一直線！温顔なる男爵は、つと近寄つて、東

の肩を打つや、

「東、もし彼が敵だつたらどうする？」

「これです！關の孫六！」

「ハハハ……」

男爵は呵々大笑したが、

「それよりか彼を利用するんぢや、我々にもし好意があるとなす

れば尙好都合ぢや、もう直に救助出来るな」

此方で男爵の言葉の終らない内、彼方の波上では、危機累卵

より危い端艇の人を助けてそのボートを後に引いて静々と戻つ

て来る。甲板上では拍手大喝采！

「では貴君は本邦人ぢやね」

「さうです、私は静岡のものです」

と云ふ言葉さへもなつかしい日本語であらうとは。

此處は船中の食堂室、男爵以下十七人の同志はすらと居並び會つて地中海上で助けたシドニー生れの土人三人もその末席に並び、ウエリン島港より上陸させたる壹名の英國人と、西班牙人を除く外、三人の外國婦人もゐる。

「どうして此方へ來られましたのぢや」

「實はお恥しい次第ですが各地を流浪した揚句です。近々日本へ歸らうと思つて居りましたのですが、一昨夜の洋人の暴擧と

同盟で石炭を販賣をせぬと云ふ、余りに意氣地ないので、實は私から供給したので單身ポートで出かけたのですけれど……何分にも擡が自由に動かし得ないものですから……」

「さうですか、では貴君が石炭の供給を……」

男爵の眼は光る。

「さうです、必ず供給いたしませう」

その一言は凜として潔よいのである。

「ごうちや諸君、此の方の任狭の好意を有難く受入ぢやないか男爵が一同を見た。同志十七人何で異議あらう。

「救ひの神だ」

感極まつて叫んだのは東である。宇佐美は嬉しさの余りホロ

くと落涙した。男爵はそれを見るや、  
「君、あれを見て下さい。五尺二寸の男が泣いてるんぢや、貴君の好意に……」

「……………」

一座は肅としてホークを動かす音さへもせぬ。

「この一滴の泪をお禮のしるしです。もし成功した曉には必ずや貴君の好意に報ひますぢや、私は東條芳臣と申すものぢやで宜敷願ひます」

「あ……………では貴君が東條男爵で御座いますか。名お前は兼々承つて居りまする、私は當市十字街路、百十五番地に居ります昨日新聞紙の遺方があまりに残念でなりません處へ、又も當市

する、須田茂忠と申すものです——」

年齢は正に三十一か二。眉は太く額にせまり。其處には動かぬ日本人氣性が灰見へる。一文字に結んだ唇は、赤くして啖火も飛ばう。眼の活々としてゐる處、額の廣い處、これみな日本人特種の顔の表情である。

「で……………どう云ふ風にしてその石炭を供給して頂けませう」  
男爵が口をつぐんだあとを引取つて口を開いたのは、宇佐美である。

「さア、それを今いろくと考へて居るんですが……………」  
須田氏は俠氣溢るゝ如き唇のほとりに、微笑を浮べて、潮にぬれし洋服の上衣を脱ぎ、

「此の三人の婦人は何處の方です」と云ふ。

「これは地中海上で海賊船と奮闘した時に救ひ上げたのです」と、横からかう云つたのは東である。

「此の士人は？」

「これですか、これもその地中海の奮闘のお土産です」

「ハハハ……さうですか、ではどうでせう、此の三人の黒奴と、三人の婦人を拜借させて下さい。私が石炭のすべてを互みに三婦人の荷物のやうにして必ず諸君の意を満しませう。即ち黒人は鳥渡の間、苦力に使ふのです」

「成程、それは妙案ぢやらう」

三鞭酒を上げてゐた男爵は、かう云ふや、  
「何分貴君のお力を貸して頂かなくちや仕様がなないんぢやから

……………」

「私は是非、私に供給させて頂きたいのです。そして日本人の畢丸の大きを見せてやりたいのです」

「正に奇想天外の警句！」

「愉快！尙出來得るなれば畢丸の垢を煎じて呑みたい位だ」

と呵々大笑した東は、

「これで漸く力瘤が入りました。石炭さへあればこんな處に永くゐなくてもいいですからなア——」

「勿論ですとも」

任侠なる須田氏は果して此の大任務を首尾よく遂行して一行を安全に南極の地へ送る事が出来るだらうか。果してこの罌丸を見よと絶叫する事が出来るだらうか。

一時厄介視せられたる三婦人と、三士人は今日はじめて役に立つやうになつたのである。

須田氏は、三婦人三士人を引連れ、我が東將軍に端艇で送られて陸地へ返つた。

いよ！須田義忠氏の任侠的大活動！宇佐美以下十人は四艘の端艇に分乗し、夜にまぎれて、そつと波止場へ向つたのである。

然るに危ぶみ抜いたる石炭は、外國夫人の荷物の如く装つて

何等の怪しもせられず、迫害も受けず、易々として波止場へ山の如く運ばれたのであつた。

呸！咬龍會の同志が怨みを吞んで翹望した石炭も須田氏の力によつて見事に船中に運び入れられたので、いざ出帆となるぞ生憎にも進路の方に當つて小さな低氣壓が起つたために止を得ず出帆を見合せて、宇佐美と東と廣島とは連立つて、市街のあちらこちらを散歩したが、とある酒肆へ入つた。

然るに此處に一ツの天災が生せんとは！呸運命の神は何故に我が探險隊をかく苦しめるのであらうか？

三人が、各々所持の大刀を鬱金の袋に包んで右手に携け、懐中には各一挺の短銃をひそませて、つと酒肆の二階へ上れば、

此處には四人の洋人が、酔つていよく解らぬ醉語を並べ合つてゐる。

三人の同志が一隅の卓に陣取つて、火酒を命令したのを見るや、彼等酔洋人は、忽ち大聲を出して、日本人種を罵りはじめた。察するに下等の労働者か或は、それに多少毛の生へた位の奴であらう。

「オイ、彼等は日本人だらう」

「さうだ」

「南極探險隊か！」

「南極へ死に行く馬鹿野郎共よ、革明や血を好む野蠻人に、科學的智識なんかあるもんか」

「然り」

「要するに死に行くんだ。だから今夜死出の山路の思出に呑み來たんだらう。苟くも神聖な洒肆に彼等野蠻人が入るなんて實に潜越の極だ」

酔が云はせるかしらぬが、余りと云へば烈しい侮辱であると第一に怒つたのは、巨大將軍たる東秋之介であつた。

「宇佐美！」

「なに？」

「洋人を一撃しやう」

「だが………」

宇佐美が躊躇の色あるや、東は、

「廣島はじめろぞ！」

と叫ぶや宇佐美の止める手を振拂つて、

「毛唐！もう一度云つて見ろ」

と早や法螺貝の如き鐵券は飛んで、一洋人の頭をいやと云ふ程！

「馬鹿野郎！ぐずぐず抜かすと眞二ツだぞ！」

と、鬱金木綿の袋の口から關孫六の柄頭だけぬつと出す。

「なにを……」

四人の洋人は顔見合すや、一人は懷中を探つて、短銃を出すうとする手を、ぐいと捻へて、肩に引擔ぐや、講道館道場二段の腕前は美事に、二階の窓から大道へ向つて眞倒様！の早

業を演じた。

「己れ！」

鐵券で胸板を突いてくる手を引拂つて、右手の肘が敵の脇腹へ觸れたかと思ふと、敵の體は仰向様にばたり。

最早かうなつては靜かに傍觀する事なぞは宇佐美や廣島には出來ぬ。

鳶鼻の一人が、短銃を手に、今や一人の洋人と組打してゐる東を打たんとしてゐるので飛鳥の如く飛かゝつて、利腕を發矢と打つた。思はず短銃を取落して、

「残念！」

と組付て来る奴を、これも起倒流の當身一本、唸と叫んで倒

れた奴を見向もせず、東は如何にと見れば、哀れや東の強力に  
 両手を折られ、のみならず喉輪絞の奇手にかしつゝ、氣絶して  
 ゐるのであつた。金程烈しく抵抗したものと見へる。

「どうしやう？」

廣島は大刀を握つたまゝ當惑する。

「面倒だから逃げちまへ、追かけたら叩き切れ！」

宇佐美はかう叫ぶや、若干の金を卓上に置いて、一目散に階  
 段を下つて、扉を排して街路へ出やうとすればこは如何に？  
 酒肆の者共が早くも通信したと見へて、手に手に券銃を擬し  
 たる警官が何十名！

「こらー！」

短銃の口は數知れず三人に向いてゐる。

最早や絶對絶命の秋である。呷、咬龍會の豪傑は如何にして  
 此の虐口より逃れ得べきぞ！

「警察署まで同行しろ！」

「縛に就け！」

「抵抗すれば殺生すぞ！」

口口に威喝しながらちり／＼と近寄るのであつた。

豪勇無比の東秋之介も流石に自分が輕擧を耻したが仕方がな  
 い。血走つた眼で宇佐美を見れば、宇佐美は大刀の柄を握り  
 めたまゝ突立つてゐた。彼等——巡查等も一命は惜しいと見へ  
 それに手並の程は知つてゐるので、踊込んで三人を捕へやうと



するものがない。稍しばし、蛇と蛙のその如く睨め合つてゐた時、遙かに砂塵を飛ばして街路の中央を一文字に駛つて来た一臺の自動車は、此の活劇の幕の正に切り落されんとする眞只中へひたと車を止めた。

其の被呂を揆ねて現はれた人はそも何者であらう。純白なる洋服を着ひ、美しき飾ある花帽子を頂いたる花顔の一美人がすと自動車上に突立つた時の美しくさ。又大膽さ、凜々しさ。烟硝の香の中に何故に此の婦人は現れたのであらう。同時！婦人の口より漏るゝ流暢なる英字。

「市長の娘——ミス、マリアは私です。父からの命令で参りました。日本人三人は市長におあづけ下さいませ。此の大街道で

血を流し骨をけづり合ふ事は決して文明人の喜ぶ事ではありま  
すまい！」

云ふや、警官に一禮し、一片の紙片を渡した、

「さア、早く此處へお乗んなさい！」

と三人を呼入れる。警官は寄り集つて、紙片を見れば名市長の名の高いスタンド氏の手形であるから。マリア嬢の行動を毫も迫害しないのであつた。

三人は思つたのである。此の虎口さへ逃れ得れば、途中自動車より逃るゝ事も出来るぞ、——口には云はねど腹に答へ、胸に問ふて、同じ三ツの思を抱いて三人が乗れば、運轉手は一散に以前の道へ引返した。

「皆さん、お目出度う」

マリア嬢は深く冠つたボンネットを揆のけて三人に丁寧に禮を施した。見れば驚く勿れ市長の娘、マリア嬢とは………彼の地中海上で救つた英國の貴婦人であらうとは………。

「どうしたんです、」

宇佐美が口を切つた。

「心配なさいますな。日本國の志士——又生命の恩人に報ゆるために市長の名を利用したのです。委しい事は船の上で……」  
 バタリと自動車が止つたかと思へば、豈圖らんや、市長の邸宅ではなく、其處は波止場で、波は永久の不平を訴へて止まぬか如く、啞塔として磯に覆つてゐる。三人の乗捨た端艇もそゝ

につながれてゐる。

咄如！怪！怪！怪！

マリア嬢と名乗つた英國婦人の手に貴婦人用の小形の短銃が光つたかと思ふと、はや引金は引かれて、運轉手の背部を一發。

「呀！」

と叫んだが最後の聲。ごろりと前へ腑向けに倒れたのを身向もせず。

「オホ、、恐ろしい女でせう。けれどね、皆さんのためですよ、早く追手の來ないうちに本船へ………」

端艇へ乗込む。三人の豪傑もはじめて蘇生した思ひで、オー  
 ル執る手も力が満ちた。

漸く本船に到いて、ほつと一息して、ありのまゝの顛末を東條男に語れば、東條男は眉をしわめたが、

「ぢやア面倒ぢやから早く錨を抜くんぢや」

と急速に出帆の用意に取りかゝる事になつた。そして英國婦人が此の三人を助ける迄の経路はかうである。

東條男から英國へ歸るだけの旅費を貰つた彼女は雀躍をしてウエリントン港へ上陸したが不幸や、自働車へ乗らんとした時旅行費用の一切はスリのために奪はれて了つたのである。

もう泣いても騒いでも仕方がない。幸ひ市長令嬢の家庭教師が入用と云ふので、傳手をもとめて、それに應じ、家庭教師と成つて市長宅へ入つたのは、まだ三日前の事、然るに今夜、慌

だしく馳け付けた下僕の話に依れば日本の軍事探偵の三人が警官と闘つてゐる。容貌はと聞けば、慥かに探險隊の三同志に似てゐる。どうかして助ける工夫はないかと突然の思案から、令嬢の服を纏い、市長の手形を盗み出して、運轉手には主人の用事と命令し、巧みに計を遂行して、波止場まで運轉手を飛ばせて此處で惨殺したのだと云ふ。

彼の英國婦人は、

「だからどうぞ私を何處かへお連れ下さい！どうぞ！」

これを聞くと東條男爵は

「同志の生命の恩人です。何處まででも好きな處までお連れしやう」と誓つたのであつた。

折柄俄かに甲板の騒がしさに驚かされて船室を出れば、十何名の同志は、甲板上に踊つたり飛んだりして。

「此處までお出で……甘酒進呈！」

とか或は又、

「来て見ろ！日本刀をお見舞申さう」

なぞ陸を向いて叫んでゐる。

陸——波止場には數知れぬ澤山の角燈が燦めいてゐる。警官が齒を噛み残念がつてゐる事であらう。

缺點あれかしと意氣組んでゐた時、酒肆樓上の大活劇・これは盲く彼等の思ふ壺にはまつたのであるが、一美人のために巧に歎かれて、無能なる警察官の譏を受けるのである故、彼等が

血眼になるのも無理ならぬ。而し海と陸ではどうする事も出来ぬ。

甲板の上からさんぐ冷笑、侮辱を檀にした上、夜氣を衝いて東洋丸は威風堂々として蒼海に向つて汽笛を鳴らしたのであつた。

(五) 悲愁歌

二個の疑問——鬱蒼たる大森林——三人の洋人——婦人の泣聲——己れ曲者——正義の双——奇遇——戀と戀——ゴリラの襲來——不意の銃聲——悲戀悲歌——麝香薔薇の蔭に美しき死體を埋む。

甲板の欄干を叩いて、嘲笑を一時に發して、ウエリントン港

を去つた東洋丸は、暗を衝いて蒼海を駛つてゐたが、果して以前  
の豫側に違はず、低氣壓は、大いなる颶風を起して、東洋丸  
を襲つたのである。前門の狼去つて、後門に虎あるの例に似て  
東洋丸は、木の葉の如く、高山の頂に押上たかと思へば、千尋  
の海底に沈んだと思はるゝ如くに弄ばれて、漂流！又漂流！

呷・自然の暴威に對する人類の反抗の微々なるかよ。二日二  
晩漂ひたる東洋丸が、風風ぎ、天晴れたる日、船を去る約十哩  
ばかりの處に一ツの島影の横はるのを見出した時は、二日二晩  
の苦闘に困憊した一同の喜びはさうであらう。船はその島に向  
つて一直線、島を去る三町ばかりの沖合に本船を止めて、島の  
状況を探るべく、二艘のボートを降して漕ぎ出した。一艘の

ボートには東將軍が主任となりて、五人一組の一隊を率ひ、  
他の一艘は、山口技師と、宇佐美忠夫とが率ひた四人。かくし  
て、一艘は島の南へ差して進み、一艘は島の北部を指して進ん  
たのであつた。

北部——こは即ち宇佐美、山口派の一隊である。

海濱には奇巖突出！到底ボートを近附ける事なんぞは思ひも  
寄らない。仕方なく、奇巖を迂回し見れば、こはこも！其處に  
は一隻の汽船らしいのが沈没してマストのみ、海面に三間ばか  
り現はれてゐるのみである。

「沈没船ぢやアないか」

「深い海と見へるね」

「この島は一體無人島なのかしら」

なぞ口口に云ひながら比較的船をつなぐに便利なる處を選んで来て見れば勿驚。こゝにも一個の疑問が横わつてゐる。

「ボートがあるんぢやアないか」

「何處のだ……やつ！日本のぢやアないか——日本の観音丸……」

「ぢやアあの沈没船は観音丸かしら」

一隊の驚きは非常に烈しいものであつた。が、兎に角島を探つて見やうと云ふので、土人一人を番人に殘して宇佐美を先當に、山口、鈴木とその間に健氣なる英國婦人を挟み、最後に一人が尾き、静々と島一面に渡る大森林へ分け入つた。

南國特産の咖啡の花は咲き、椰子、バナ、は繁殖し、幹木は鬱蒼として、物凄き氣勢は自然に肌粟を生せしめる。一體が悉く短銃を片手に擬して肅々として雑草を根を分けて進だ時、先導の宇佐美忠夫の足は釘付されたるが如に止つた。

「どうしたね」

後の山口技師が小聲で呟く、

「怪しい！此處に血に染んだハンカチーフがある。而も新らし

いんだ！生々しい血だ」

指先でつまんで山口に示した。山口技師はそれを鈴木に示した、鈴木はそれをマリア嬢（同志が何時かマリアと呼ぶやうになりしなり）に示した。流石に大膽でも嬢は女性である。生し

い血痕けつこんの附着まぎやくした手帛ハンカチーフに思おもはづ顔色がんしよくを變かへた。

「どうも怪あやしい、草くさがこんななに倒たふれてゐるし、血ちがこゝらへ散ちつてゐるんだから……」

宇佐美うさみは漸しほくイんで考かんがへこんだが、聽やて、一同どうを振返すかへつて、

「猛進まうしん！ 但し警戒りかいを要えす。」

と微笑びせうして注意ちういするや、又またも奥深おくふかく進すすんだ。咄う！とある雜草ざつさうの蔭かげより一發はつの彈丸だんぐわんは飛とんで、紅顔こうがん少年せうねん宇佐美うさみが頂いたいた奈翁帽ナポレオンぼう子しをかすめた。

「それ！」

一隊たいはバタリと身みを雜草ざつさうの中なかへ伏ふした時とき、又またもバチン！バチン！と二發はつひつ響ひびいた。音おとより察さつすれば儘たしかかに三間さんけんばかり離はなれてゐ

る。そつと顔かほを上げた宇佐美うさみは三間さんけんばかり彼方あな方に烈はげしく雜草ざつさうの交まじり合あつた叢くさむらを睨のぞだが、身みは半なかば伏ふせたまゝ、その叢くさむらへ向むかつて二三發はつ！つゞいて山口技師やまぐちしもそれを學まなんで發砲はつぱうした。白しろい煙けぶりが蒙まう々として散さんじたる中なか！

叢くさむらの中なかからバラ／＼と飛出とびだしたのは、三名さんめいの洋人やうじんである。

「待まちて！」

宇佐美うさみは叫喚きうくわん一番いちばん、ピストルを洋式やうしきの廻打まはしうちにすれば、一人ひとりはバタリと倒たふれた。

山口技師やまぐちしの發はした一發はつに又またも一人ひとりの洋人やうじんを倒たふしたが、一人ひとりはとう／＼杜もりの奥深おくふかく逃にげて了しまつたのであつた。

早速さつそく近付ちかづいた宇佐美うさみと、山口技師やまぐちしの二人ふたりは、

「オイ！」

と英語で呼んだが返事はなかつた。

「オイ！」

又呼んだが矢張り返事はなかつたのである。見れば一人は腦漿を打貫かれ、一人は背中から右肺に貫通傷を受けてゐる。

「死んぢやつたんだ！」

疑問解決のために惜しい料を殺して了つたのである。

「兩人とも致命傷だから不可思議至極だ」

處へ、鈴木やマリア嬢等がドカ／＼と来る。これは杜の奥深く逃去つた一洋人を追撃したのであつた。

「どうだつたね」

山口技師が温顔に笑を堪へて云ふ。

「逃がして了ひました。だが、最前の血染の手帛の主は分りませんでしたよ、逃げた奴なんです。左の腕から血痕がしたゝるんですものなア。でも叢の中に落ちた血汐！は余り氣味のいゝものぢやアないんですな」

「さうだらうとも……」

宇佐美も笑ふ。

「兩人はどうしたんです」と鈴木生。

「癪に障るぢやアないか、兩人が二人とも致命傷だから」

山口技師はかう云ひながらも兩人のポケットや何かを險べはじめた。宇佐美の命令に鈴木が、三人の隠れてゐた叢の中を覗



きに行つたがこれ、又、突頓狂な大聲で……。

「收獲！收獲！」

と高く叫んだのであつた。

「何が……」

宇佐美が慌て、近寄れば、鈴木は手に一冊の手帳と、婦人持の金指環とを振つて踊らんばかりに喜こんである。

「どれ見せたまへ」

手帳をとつて、その頁を開いた宇佐美の顔いろは見る／＼變つて、愕然としてあやふく倒れやうとしたのであつた。

「その指環を烏渡！」

鈴木の手から指環を受取つて、その裏を覗けば、これは又、

宇佐美を再び驚かせるものであつた。

「一大事！」

宇佐美はべつたりと叢の上へ座つて了ふやその紅頬は青ざめて唇は烈しく痙攣しはじめたのであつた。

「どうしたんだね、宇佐美君！」

山口技師が草の上へ端然として座つてゐる宇佐美の肩を叩いた。

「一大事だ！僕についけ、先生の令嬢の運命が危機に迫つてゐるんだ村田……露子の生命が危ないんだ」

と云ふや、馳出した。驚ろいた技師はそれを無理やりに制して、

「どうしたんだ、先生の令嬢つて東條家のか」

「然り！これを見たまへ、而してこれを………村田露子の生命も危いんだ。」

手帳と指環は山口技師の手に渡された。山口技師は先づ指環の裏に鑄付られた「東條加代子」と云ふ名に驚かされ而して、手帳の二頁に書いた文字によつて一入驚かされたのであつた。

「先生の令嬢はどうしてこんな處へ………それから村田つて此の手帳の主は君に何してゐた女性ぢやアないか………不思議だ！」

山口技師は踊り上り、地を踏破らんばかりに地段大踏んだが、さてこれと云つて妙案も浮ばない。

宇佐美は手早く手帳の文字を拾ひよみする。手帳の劈頭には

「秘密」と二字がなめらかなる手續で記され、第一頁には十一月八日としてあるではないか！十一月八日！肝此の日こそ咬龍會の一團が母國の陸地を放れた日である。此の日の一事は如何なる事が書いてあらうと讀みはじめ。

親がなんでせう。私はもう十九年まで育て上げられて親の愛には倦んでゐます。金がなんでせう。百萬の力で戀が買へませうか美しい神聖な女の操を購へますか、名譽や位置で戀が買へ愛が生れるなら世の中の人間は偶像です。私はすべての男性の權威も位置も財産も認めません。私が生のあるうちに認めるものは、宇佐美さん一人です。私は親を捨てます。母も妹も弟も位置も名譽もすべてを捨て、宇佐美さんの後

を追います。さうして此の其情！眞心で宇佐美さんを動かして見せます……

また女々しい事が澤山書いてある。宇佐美は頬には一時紅の色が上つたがそも束の間に醒めるや非常なる大決心の色が眉宇の間に漲つたのである。

「君、出懸やう、躊躇する場合でない」

「然り」

と答へた技師は唇を噛んで立上つた、不思議さうな顔をしてマリア嬢も従ふ。五人の一派は或は幹木の枝をくぐり、或は雑草の中を歩き、マリア嬢の永き洋服の裳は破れる位、約一時間

も森中を歩いて見たが、一向手がかりがない。尋ねあぐんで、一先腰をとある叢の中へ据へて用意の食物を喫し、水に口中を霑してゐる最中！何處よりか婦人の泣き聲が聞へたのである。而もだん／＼それが近寄つて来る。

耳を傾けてゐた山口技師は、食料を投出して立上つた。宇佐美は慌て、走り出さうとする鈴木を制して尙も叫び聲に耳を傾ける。

「アレ——……人殺し……」

断末鬼の聲の如き女の泣聲。危機は迫つてゐるに相違ない。鈴木と他の花田と云ふ同志とマリア嬢は此處に止まる事にし、山口と宇佐美とが聲のする方へ一目散に馳せつけた。

折しも兩人の女性——云はづと知れた村田露子と東條加代子であらう。

純白の洋服の處々を血痕にて染め、雜草の中を一目散に逃げて来る。髪の毛はおどろに亂れ、氣の小さい者が見たらば氣死して了ふ事であらう。

「山口君」

「宇佐美君」

聲をひそめて今や來れと待つてゐると、哀れや一女子がバタリと倒れた。ついでにそれに躡いて重なり合つて一婦人が倒れた。

咄！後から追かけて來たのは二名の洋人である。赤い髭を同

じやうに生し、手に鋭利な刀物を持つてゐる。忽ち、兩女の黒髪をとつて引起すや、

メスを眼の前へ差付けて、

「云ふ事を聞かんければ殺すがどうだ」

と云ふたが女はもう氣力を失つて口をだに聞く事は出來ずバタリと倒れた。

かの如くになつてゐる婦人に……貪慾飽く事を知らぬ彼等は捨て置ば卑むべき慾の犠牲にでも仕兼まじき様子に、怒氣心頭より發したる山口と宇佐美は短銃の覗いをつけて、一發。

「アッ」

と云つて倒れた様子に二人は慌て、かけ寄ればこは如何に、

彼等洋人二人も俄破とばかり揆起たのである。見れば一人は腕一人は足に弾傷を受けてゐる、例の大洋刀を揮つて斬つてかゝるを、

「猪口才な！」

とばかり二尺六寸の日本刀は鞘を外れて毛唐の右肩深く斬下た。

「呀！」

と叫んで倒れる奴を横に拂つて見事に車斬！血振ひして山口技師は如何に見れば、日本刀を持たぬ同技師は短銃を、毛唐人は例の大洋刀を、互に睨合つてゐる。

「技師！助太刀だ！」

宇佐美は一聲躍り込んで兇器を持ちし毛唐の右手を肩あたりからすばりと斬落した。

及は日本武士の精華たり魂たる日本刀である。而も細身ながら、喜右衛門村正の作である。斬味に於ては師匠正宗も遠く及ばざりし村正の銘作、斬手は眞影流を中學一年から習ひはじめて卒業の時には免許を許された使手である。

忽ち倒れる處を踏込んで、細首を丁と飛ばした。



其處へ合圖によつて鈴木、花田、及びマリア嬢が来た。

皆な眞實を盡して介抱する。その効果があつたか、それとも

兩女の運命が強かつたのか露子も加代子も眼を見開いたのである。

「ア！宇佐美さん。」

露子は宇佐美の腕に縋つてハラ／＼と熱い涙を草原に落すのであつた。加代子は露子が如何うして宇佐美を知つてゐるのだらうと云ふ疑問と、も一ツは他の同志の手前もあるの躍る胸の血を押へて耐ふる心苦しき。その苦しきはおのづから涙を誘つた。

「加代子さん、どうして來たんです」

山口技師は静かに問ふ。

「それよりお父様は？……」

「本船にのられます」

「本船で……東洋丸です。近いんですからすぐさま御案内いたしませう」

加代子は斯う云ふや露子を見て、

「露子さん、貴友は宇佐美さんを御存じなの」

と顫聲で問ふ。

「ハア——」

と答へた露子は氣まり悪氣に一同を見廻したが、加代子の心が宇佐美にあると知るや、

「はア——あの鳥渡知つてゐるんですわ……」  
と苦しい答辨する。

「まア疲れてゐられるでせうから船まで行きませう、そしてくわしいお話を承りませう」

五人は疲労しきつた兩女に水を與へ、パンを供し、そして除ろに歩き出した。今まで歩いて來た道——草の例れてゐるのを目當に……。然るにいつどう迷つたか歩いても歩いてもボートから降りた海濱へは出ないのである。途方に呉れたものゝ、尙一生懸命に歩いてゐる中に、又も烈しい人の叫びを耳にしたのである。それに同時に烈しい猛獸の吠ゆる聲も聞へる、

『どうしたんだらう』

山口技師は足を止めたが、

東の一隊が、毛唐の殘黨か取敢ず、出かけて見やう。猛獸の

襲來を受けたやうだから……」

鈴木と花山と、マリア嬢の三人は例によつて兩女の守護隊に殘されて、山口技師宇佐美忠夫は、林を駆け抜けて一散に硝煙の立上る方を指して進む事約一二町。見れば、其處から少しの間は廣々としたる野原で枝一本眼を遮るものがない。その眞只中で、同志五人の別隊が、奮戦突撃、ゴリラの群と闘つてゐるのであつた。猛獸中の王とまで謠はれるゴリラ四頭は澤山な彈丸を受けながらも五人を襲つて、これを屠らうとしてゐる。その中に突立ち獅子王の荒れたるが如く大刀を抜かざして奮闘してゐるのは巨大將軍である。

『救助だ！東君、安心したまへ！』

宇佐美と山口とは六連發の短銃を廻打に都合併せて十二發。それでなくとも五人の豪傑連に惱まされてゐたのであるもの、とう／＼四頭のゴリラは倒れたのである。物凄い叫喚を發して——。東將軍は一刀の柄の碎けよとばかり、その死骸を滅多斬にした。

漸く血を拭つて立上つた時、山口と宇佐美を見て、

「何かあつたか。」

「あつたとも一大事件——人間の夢にたに考ふる事能はざる程の大事件だ！」

「嘘を吐け！からかふんだらう。」

「馬鹿を云へ、擲擧ふなんて事があるもんか。一大事なんだ、

尾いて来て見ろ！」

馳てゴリラの肉の最も旨さうな處だけを切取つて、それを擔ひ、靜かに林を抜けて以前の處——兩令嬢の外、鈴木などが待つてゐる處へ來た時、

「あ！あれは村田……一人は先生の令嬢ぢやアないか……」

東は慌て、馳出した。

「お嬢さんですか、どうして……」

とまだゴリラを屠つて、血のついた刃を提げたまゝである。令嬢加代子は軽く會釋したが、

「船で話してよ、ゆつくり、今は疲れて口を聞くのも厭なの——」  
「ハア——」



巨大漢は敬しく、禮をして退くや宇佐美の方を見て、

「一體どうしたんだ！」

「俺が知ってるもんか」

「嘘を吐け、出發の晩……」

と小聲で云つて、

「令嬢が君の盃へ三鞭を注ぐ時の格好つたらなかつたぞ！だか

らこぼしたんだ。のみならず村田まで……ねね君山口君、今

日はどうしても宇佐美に何か奢らせんでは……」

「勿論さうですとも！……」

山口技師は兩女に聞へよがし。兩女ともお互に頬を赧して歩

み出した。

「土人の棲家でも見出したかね」

宇佐美が改まつて東に問へば、

「そんなものはあるもんか、海鳥の糞と、椰揄の森林と、バナ、

ヤバインナップル位だ、あの山の向へ行つたら或は土人が棲ま

んとも限らんさ、而し此の大森林と、奇岩突出せる海岸ぢやア第

一棲む所かないよ。水牛やゴリラの群は余程澤山あると見へる」

東はかう説明すると、「余り大きい島ではないらしいね、勿論

山の彼方は分らないんだが、此方位の面積とすれば、全面積で

十哩あるが、だがそんなないだらう、」

「僕の方ぢやアね、劈頭第一に日本の沈没汽船を見出したの

だ、その奇岩に乗上げて沈没したのだらう。それに一艘のボ-

トが乗捨てたまふ海濱に捨てゝあるんだらう。少なからず驚ろいたね、處が森林の中で、いよゝゝ奇怪極まる事實に遭遇したんだ。」

「どんな事實に？……」

東は思はず身を寄せる。眼には好氣の色を湛へてゐる。

「それからどうしたんだ、宇佐美君！」

「それから、その近所を一體に怪しんだ。するとある叢だね。その中か短銃が響いたんだ。僕のナポレオン帽は此の通り！」

「危ない處だったなア」

知らずゝの間、手に汗を握つた東は、

「それから！」

と後を催促する。

「忽ち躍り込んで一刀兩断！眞ニツ！」

「眞實か！」

これは東も多少脚色を加へてあるとでも思つたのであらう。

「馬鹿な事を云へ、憚ながら嘘はまだ一度も吐いた例がないん」

だよ。ハハハハ……」

宇佐美は例に依つて優しく笑つた。而して

「山口君と協力して二人は殺つつけたがどうゝ一人を逃しち

やつた。残念で耐らず追馳けると偶然さ。二人の毛唐奴、この

二令嬢を強迫してゐる處へ出たのさね、忽ち又正義の刃を揮つ

たんだが村正の切味は流石にいゝね」

「で……その逃げた奴は見つからんのかね」  
「何處へ行つたか分らないか、最前令嬢達から聞く處によれば、最初の三人は一種の歩哨で、他の二名の暴行を見張りしてゐたらしいんだ」

「成程！」

腕を組んで暫し考へた東は、

「その逃げた奴を捉へたいな、今日は人間は一足も切らないんだから——」

と、孫六の柄頭を叩き、双腕を振り、豪傑好き敵のなきに卑肉の嘆である。

此の十有余人の團隊が一團になつて、とある——鬱蒼たる氣

の二入深く、そのあたりは小暗い木蔭に差蒐つた刹那！

一發の銃聲は忽ち四邊の寂寞たる氣を破つて、人々の膽を寒からしめた。同時に、

「呀！」

と叫んで、ドーンと倒れたのは、英國の貴婦人——我が三志士を助けてくれたる大恩人のマリヤ嬢で白衣の胸あたりよりサツと鮮血は吹き出して、忽ちに四邊の叢は朱に染つた。

「曲者！」

これ東秋之介が孫六の大刀を血に潤をせるのは絶好の機會！  
「卑劣だぞ、何奴だ」

聲は雷の如く、叢の中深く分け入れば又も一發。

「毛唐！日本刀の斬味を見ろ！」  
 叢の中で一聲高く叫んだと聞く間に、

「キヤツ！」

と魂消る断末魔の聲、聲と同時に、東が襟髪とつて引づり出した毛唐を見れば、兼て、血染のハンカチーフを捨てた奴で、左手に縋帯をしてゐる。

「やい！何の怨みで我々を狙撃したんだ。オイ毛唐、洋人！日本刀の切味は分つたか！」

と二三度蹴れば、哀れや肩先深く斬下げられてゐるので、息は絶へくで口を聞く事なんぞは到底覺束ないのであつた。

一方ではマリア嬢の創口を縋帯したりするに大騒ぎをした

が、鮮血は堪へずブク〜と溢れ出て最早や萬事終矣であらう。苦しい息使をしつゝあるマリア嬢は、

「日本の紳士！宇佐美さんよ………」

聲はかすかに語尾は聞きとれぬ位である。

「マリアさん、私です、宇佐美、ですしつかりおしなさい。幸

ひ創口を浅いんです」

「いわ………いわ駄目です、肺を打たれました。もう私は死にます、だから………だから………手を………手を………」

両手を出して宇佐美の手をしかと握るや、

「死んでも口惜しくありません………日本の紳士——宇佐美さんの手を抱いて死ぬんですもの——」

流暢なる英語でかう叫んだか、その息は刻一刻と弱つて行つた。

その周囲を包んだ人々は勿論、宇佐美も無言のまま、涙を嚙んで泣いたのであつた。マリア嬢の何時か宇佐美の幻影を慕ふ人となつてゐたのであらうとは！ 悲しい戀である。而してその死は實に壯烈の極である。決死艦隊に交つて、骸を蒼海中の無人島の森中に埋むとも、そも！ 何等の壯烈ぞ！ 悲壯これより甚だしきものがあらうか！

波の音律は悲しき戀を抱きて逝ける一美人の死を悲む曲の如く、森を渡る風は颯々として、悲愁の歌の如し。

「もう息は絶へた！」

宇佐美はマリアの息を窺つたが、

「いよく駄目だよ」

と同志を仰ぎ見る。

「悲惨な極だ！」

東は義に勇む豪傑だけに、泪は他人より早いのである。

「無言の戀！ 實に美しい！」

山口技師はかう叫んだが、

「どうしやう」

と云つて宇佐美を見る。

「さうだね、本船へ持つて行つた處で仕様がななし、それに水葬（海中へ投入する事）も氣の毒だし、どうしやう」

宇佐美が當惑したやうな面持を眺めたる、村田露子、東條加代子の心の中は如何であらう。

「ね、何處かへ埋めやうぢやアないか。」

東は大刀を提げたまゝ、あちらこちらと探し廻つたが、

「妙な木がある。誰か来てくれ。何だらう」

と十五六間離れた處で大聲を上げたのであつた。

第一に馳付たのは山口技師である。

「何だ！」

「何か匂ふだらう、素的ないゝ匂が……」

「む。成程」

始めて氣が付いた山口は、

「素的だ、何だらう、何が匂ふんだらう」

「僕もさんざ考へたんだが、これなんだ、麝香薔薇なんだ、今

恰度花盛りだからね、僕は最初麝香猫だと思つたんだよ、南國

特産の……處が此の薔薇さ、どうだい此の蔭へ死骸を埋めて

やらうぢやアないか」

「成程、妙案、妙案」

山口技師はすぐさま賛成した。東が飛んで行つて宇佐美に相

談すれば、これも異議があらう筈がなく、忽ち賛成したのであ

つた。

「麝香薔薇の下蔭に花の死骸を埋むるなんて余り詩的にすぎ

る」

誰かが云ふと、

「壯烈な死を遂げた一婦人の芳ばしい名の永久に消へないやう……に薔薇の香のやう美しい香が匂ふやう。我々の間に此の婦人の名を忘れちやアならない」

と誰かが叫んだ。大勢の事であるから十分も経たぬ間に穴は掘られた。それへ白衣の血に滲んだまゝの死骸を入れて、一人くくに心ばかりの土を投込み、いと丁寧に埋没して了つたのである。

「あゝ！」

漸く婦人の死體を埋め終つてホツと一息した宇佐美はかう呟やくや、押し出すやうに吐息したのである。

「オイ、宇佐美、君の顔面にはアイロンを當てるか、硫酸でもかけろよ、余りに美しく優しく女殺しに出来てゐる、此の悲劇を見ろ！俺ア泣いちやつた」

東はかう叫んで尙溢れ出る涙を拭つたが、  
「どうも俺は涙が早く出て困る、」

あはれ英國の貴婦人として良人と共に密月旅行の楽しい旅の途次、地中海上で海賊船に襲はれ、良人は慘殺され、身は賊魁のために卑むべき玩弄物にされつゝあるを、狂狹なる我が咬龍會の志士に救はれて、ウニリン港より放たれたが、志士の遭難を聞くや、大膽にも必生の恩に報ゆるために群がる警官を欺いて、志士を救たる不運、薄命の美人マリア嬢の名は無入島の奇

岩に寄せて碎くる波の音よりも高い事であらう。芳名は麝香薔薇の香よりも高くく匂ふ事だらう。

(六) 狂戀佳人

愛女の失踪——三浦半島一角の遭難——佳人が佳人を救ふ——戀の敵——母の使命——觀音丸へ乗込む——大颶風——沈没——洋人に救助さる——ピストルの強迫——森中の活劇。

讀者諸君よ。かく讀み來つて諸君は不思議の眉を寄せらるゝ事があらう。そは東條男爵家第一の令嬢加代子が何故に、怪しき無人島に來たのであらう？ 帝都にて音に聞へし大資産家たる村田家の令嬢露子が、供も伴れずに、何故に絶海の孤島に

——而も東條加代子と共に現はれたのだらう？ 何れにするも不可思議極きな現象である。著者は此處に遡つて此の原因を讀者の前に披歴し、讀者諸君の得たる一大疑問を解決させねばならぬ。

讀者よ、記憶してゐる事だらう。頃は霜白く屋上に凍る十一月のどある夜、正に妖魔白鬼の跳梁を檀にする寂寞深沈たる帝都の丑滿時、新橋停車場の構内に現はれたる一臺の自動車のあつたことを——而してその自動車に男装せる一佳人がありし事も記憶の新たなるものであらう。

その美人村田露子が父を捨て、母を捨て、約一萬圓に近き金を抱いて、村田家の邸宅より失踪したのは、三浦半島の一島の



砂丘より電光一閃したる夜の翌日であつた。その露子の机の上にか置れたる一封の書置に曰く。

十九年の永い間お育て下すつた大恩を報ゆるに失踪！ 何と云ふ不孝の子でせう。けれども、いとしい御両親をまで捨て、失踪せねばならぬ私には世の中に二人とない不幸な人なんです。何事でも私の願なら聞いて下すつた御両親も今度の大望ばかりは必ず御承知下さらないと思ひました。で御座いますから、このやうなものを残して暫時無断でお暇をいたいたのです。

近い将来に必ず幸福の鍵を握つて歸つて参りますので、そ

の間は誰にも……親籍でも骨肉にも知らさないで置いて下さいませ。もしこれが公になつて、警察署の手からでも捜索するやうな事が御座いましたならばもう再び御目もじいたしますまい。息ある身では……なつかしき御両親さまよ、不孝の兒に一年間の猶豫を興へて下さいませ。

半ば示威運動の如き文字を連ねたる短かき一封の手紙が失踪せる露子の机の上に見出されたる時、これを見て驚愕せる両親の聽て蒼ざめし憂愁の色を顔に現はしたる時、愛嬢露子は何處の空を馳つてゐたのだらう。

「困つた喃、どうしやうか……」

半白の長き髭を力なく垂れし露子の父の正明が、男の眼に  
涙を堪へて云つた。

「警察の力を借りるつて此の通り書いてあるんですか……  
もしか——」

子を思ふ親の心の哀れさよ、露子が母の美彌子は眼のふちを  
紅ふ泣き脹らしてゐるではないか！

「それでも一應届だけいたして置いたら如何でせう？」

「何處へ……」

「警察署で御座います……」

「馬鹿な！」

正明は大喝する。

「それが出来るやうなら心配はせん。もし露子の身の上にも  
變化があつたらどうする？」

「ハア……」

腑向けるは溢れ出する泪を拭ふためであらう。

悲愁の聲、灰色の暗雲の兩親の額の皺を多くせしめし際。横  
須賀港を距る約三里ばかり隔たりたる一村落の松の並木を、砂  
白き磯に添ひて妙齡の一美人が物思はし氣に歩いてゐるのであ  
つた。こは松並木を抜いて高く聳ゆる東條男の別荘の程近き處  
である。

この美人こそ疑ふ方なき村田露子である。露子は何故に此處  
の寂しき夕暮の濱を一人歩むのであらう。慈愛溢るゝ兩親の膝

下を逃れて、一村落の松並木を彷徨し何事を企てんとするのであるか、折柄此の夕暮の色を衝きて、煉瓦圍ひの別荘より漏れしマン  
 ドリンの妙なる音波！これぞ東條男の愛嬢の何れか、弾する一節であらう。その妙な音律に従ひて、唇を漏るゝ歌の一節は、思はず露子の全身の血を躍らしめたのであつた。そも歌とは何ぞ。

行きにし方は何れぞと  
 岩に上りてながめしも  
 波路の果は灰色よ  
 泪流れて見て分かず

せめて慰むすべもやと  
 歌に心をかへせしも  
 そはしき罪か詩の神の  
 助ありとも思れず

笛の手中に清き音は  
 安き身にこそ興を見れ  
 人を怨みて動する身  
 只なかしむる節ばかり

戀する人に「忘却」と  
強き心を與へずや

今はた君は去り行きて

戀の盃くつがへる

あゝ人の世はぬばたまの

こほれる肌にとらんのみ

手負の鷺は巢に歸り

つばさを噛みて泣くがごと

岩にすがりて咽び入る

少女ありとはしるや知らずや。

高調に達せる時の悲愁！低音なる時の悲哀——交も身に迫つ  
て、露子は松の並木に踞んだるまゝ、聞惚れし後より近付いた  
る壹人の荒くれ男があつた。

彼は森林の中にて露子の白魚の如き織指に、燦然として輝く  
尊き寶石入の指環を發現したのと、一つは天女とまがふ露子の  
容姿に、卑き野心の生じたのである。

音楽の微妙なる曲節に酔はされて自失したる如き露子の背後  
よりむづと組付くや、手を持って花の唇を壓いで、これを小脇  
に抱へてかけ出さんとしたのであつた。

「アレー」

振り逃げんとしたが、一つは堂々たる荒くれ男に、一つは箸か筆より重きものは持ちたる事なき織手。兩人の批較は虎と猫の如く、鷲に掴まれたる雀も同然。

バタ／＼と三四間も引づつたが、一生懸命の抵抗に、思はず小手をゆるめし處を、つと抜けた露子は、怒りの形相恐ろしく、血走りし眼を見張つて、ハタと睨み、

「何をなさる。失禮な！」

「ハハハハ……」

暴漢はせつら笑ひ、

「そんな優腕でへい左様ならつて引込む兄さんかと思ひなさるけえ。船の舳に突立つてよ、櫓を握つて立つた日にア、矢でも

鐵砲でも、銃でも鯨でも金輪才動かねわ兄哥だせへッへッ……

物思々云ひしが、突如、鐵腕を伸して、露子の右手を掴むで、ちり／＼と前へ引寄せたのである。

「まづこの指環を寄としねわ、厭だと言つても貰ふんだ」

此時、これをこばむかと思ひの外、露子はにやりと笑つて、

「これが欲しいんですか、そんなら早く云へば上げましたものオホホ……これは渡金ぢやアありませんよ、でも生命には替へられませんものね……」

自ら外して暴漢に渡した。

「さう出なくちやア嘘だ、俺だつて何も初めからさう手荒い療

治はしたくねんだ」

手の上で指環を二三度打返し打返して眺めてるだが、忽ち

「呀！」

と叫ぶや、指環を投げ出した。

「どうしたの？」

露子が松の木を樹立にとつて、防戦の用意しながら聞けば、

「痛い、耐らなく痛へ……」

と叫んだが、聽て大眼活を見聞いた。

「此の女郎奴、とんでもねね真似をしやがる！此の指環にやア

毒薬が入つてゐるぢやアねわか！」

と又もや痛さをこらへて躍かゝらんとする一刹那！

巍然と高い六角塔の尖端の小窓より放たれたる銀の簪は飄と  
鳴つて正に手負し虎の如き勢の暴漢の頬へブツリ。如何なる暴  
漢であらうとも第二の痛手に一と耐りもなく松原にドツと倒る  
れば、露子は蘇生の思ひ、逸早く此處を去らんとした時、

「貴女、少々！」

と何れかより優しい女の聲。露子は再びギョツとせざるを得  
なかつたのである。露子はまた電光石火の間に銀の簪が當座の  
手裡劍になつた事をしらぬのであつた。

「誰ですか！」

眼を四邊にくばつたけれどもそれらしい人の影さへ見へぬ。

「呸！矢張り私の神経かしら！」

「呔やいて再び歩き出すと、

「貴女少々！」

と聲は正に天の方より。

「ハテ」

と思はず六角塔をふりあをげば、窓より身を乗り出したる妙齡の一美人！これぞマンドリンの弾手であらうと、露子はすぐ気が付いたのである。

「失禮ですが鳥渡お待ち下さい、只今それまで参りますから……」

「ハア……」

と答へたが、露子は不審の眉をしわめざるを得なかつた。何用あつて美人は私を止めたのであらう——と、けれども漸く氣

を沈靜して考へれば、これぞ咬龍會の首領、東條男爵家の別荘！  
今のは慥かに令嬢であらう。宇佐美から時折聞いた三令嬢の中  
の何れか知らぬが、宇佐美の實際の消息を知るは好屈撓の獲物  
と待つ程に、大門を開けて現れ來たのは以前の令嬢で、身に  
は白衣の洋服を纏つてゐる。

「只今はあんな處から失禮！」

鮮かに笑かたむけて、

「不意の御遭難で嘸や驚きなされたのでせう」

「ハアあの……びつくりいたしました」

「何處もお怪我が御座いませんで……」

「有難ふ御座います……別に何處にも異状は……」

露子は暴漢の手を逃れやうと藻掻いたために稍ちつたる鬢の毛をなせ上るや、令嬢の顔を盗み見る。決断力の強き事はその唇元が證明し、眉のやさしき處は、その心を表白するが如くである。

「實は、私がこんなものを投げましたので……」

令嬢は、氣絶せる暴漢の体へづかくと進み寄つて、

「これ！」

と頬より抜き取つたものは、銀の簪である。二本の足は血に染つてゐる。

「まア——」

驚愕の眼を見張つた露子は、今更氣が付いて、令嬢の前へ丁

事に頭を下げた。

「真に有難ふ御座いました。氣が轉倒いたしましたので……少しも氣が付きませんでした」

「いわ、どういたしましたして……あのこれからどちらへ行らつしやいます、失禮で御座いますが……」

「ハア……あの……」

此處に及んで露子はハタと當惑を感ぜざるを得なかつた。露子の行かんとしたる處は、我が眼の前に立つたる令嬢の家——赤い煉瓦で包まれた東條男爵の別荘であるもの——。

「實はいろいろの事情が御座いまして……家を出て参りましたのですが……」



露子の眼から泪がハラ／＼と溢れ落ちた。

「あゝ左様で御座いますか」  
同情に耐へぬやうな面持をしたる令嬢は、

「とりあへず宅へいらつしやいませんか……これからごちへ行  
らつしやるにしても三里も町と隔てゝ居りますので……それに  
こんなに暗くなつて参りましたので御座いますの——」

露子は願つたりかなつたりの幸である。暴漢に襲撃されたの  
が、露子が東條家へ近付くべき好機会となつたのだ。

「でも恐れ入りますから……」

「いえ、そんな御遠慮には及びませんの、それに今日は母も二  
人の妹も東京へ参りまして留守で御座いますから——」

一度は辭して二度辭すのは卑屈である。況んや辭退したとて  
行く處のない露子は、泪を流して厚意を謝したのであつた。令  
嬢はいざ去らうとする時、

「貴女の指環は……先程、暴漢にお渡しなすつたやうでし  
たが……」

「ハアあの——あんな毒劑なんぞ入れて置きました、誠にお羞  
しいので御座いますよ」

「いね、私はあの様子を拜見して何か深いお考がある事かと  
思ひましたのですわ——」

其處此處を探せば一間も隔てた處に、ダイヤ入りの指環のみ  
は燦として輝やいてゐた。

それを毒汁の壺の蓋をして静かに左手に輝かせて、令嬢に従つて、曾つて志士のくつした扉を開いて入つた。  
諸君よ、露子が暴漢のために苦しめられつゝある時、銀の簪を手近の手裡劍にして、見事暴漢を斃した健氣なる婦人は誰と思考さるゝや。

彼女こそは、日夜、「行きにし方」を微吟して去り行きし人の面影——宇佐美忠夫の幻影を胸に描き、頭に映して自ら慰めてゐる東條男の第一の令嬢！加代子である。加代子と露子！此の兩人は知らば正に戀の敵であるのに——咄！偶然に與へられた運命の奇しき。兩人の運命は如何になるであらうか？——。此の美しき二佳人の前には如何なる運命の舞臺が展開さるゝや

二人は展開されたる舞臺上に如何なる活動をなす耶！

咬龍會の一行が、暗夜三浦岬を開纜せし翌日、夫人は男爵の命を奉じて、東京の某新聞社を訪れたのであつた。恰度露子はそれと反對に三浦岬の一端の村落を訪れたのである。曾つて、出發の前——三鞭酒の盃を上げて、宇佐美が「桃園三傑の契」を唄ひ、「十八交結建兒社」を歌つた一室には思は同じ南極の空に馳する二人の佳人が、膝を交へて語つてゐる。秋水一閉！火花は散る東秋之介が亂舞したのも此の室である。加代子が顛へる手に盃を覆して卓の上を濡らしたのも此處だ。加代子の思出多き事は勿論である。壁間に掲げられたる十八人の一行の寫

真——その中央に直立せる青年の姿に露子の瞳は電光の如くに  
飛ぶ。

「で御座いますと、南極探險隊に加はりたいと仰有るんで御座  
いますのね……」

「ハイ……女性として余り生意氣のやうでは御座いますが」  
「でも不思議ですわね、あれだけ秘密を守つてゐたのに、誰  
から漏れたのでせう。そして失禮ですか村田さん、それは團員  
の口から直接に貴女のお耳へ入つたので御座いますか——」

「あの我儘を申すやうですけれどそれだけはごうぞ……も——  
申上ますと、男子として堅く誓つた秘密條約を破つた——まあ  
變節者を一人出さなければなりませんので……」

「あゝ、左様で御座いますわね、ではそれはお伺いたしますま  
い！でももう出懸て了つたのですから、只今では致方が御座い  
ません」

「ハア、實は昨日出發の事も承知いたして居りましたのですが  
……」

と云ふて、ハラ／＼と落涙した。そして顔を上げたが、  
「實をおはなしいたしますと、同志の中に私の……私の……」

と幾度か聲を嚙み、唾を呑んで、  
「意中の人が御座いますの」

と、聲と共に又も下る紅涙泉々！  
「あ？意中の人！」

思は同じ加代子である。

「お名前は……」

と思はづ急ぎ込んだが、ぼつと赧くなるや、

「さうで御座いますか！」

と太く吐息するのであつた。

暫く二人は沈黙に落つた。而して、

「あの實は……」

と口を開いたのは加代子である。

「實は私にも意中の人が御座いますのー」

加代子は我心と同じ人と思へば只管になつかしく、かく打明  
てしまつたのであつた。

「まア——」

涙に濡れた眼を上げた露子は、「まア」とのみ同じ言葉を二度  
くりかへした。

「それで私も行きたいのですの、でも今の處は仕方がありませ  
んから、近いうちに必ず何か用事が出来まするんですよ、で……  
…其時には是非大任務を帯びて行かうと思ひますの、勿論南極  
まで行かなくとも、シドニイ位までは……」

加代子は尙語りつづける。

「ですから何んならその時にでも……而しあの何で御座いま  
すか、貴女のその何の方つてのはお幾歳位ですの——」

「ハアあの……」